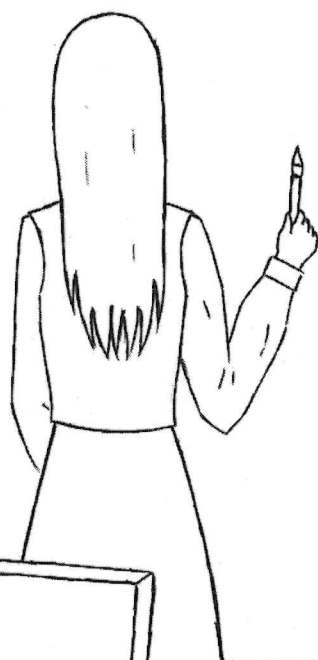
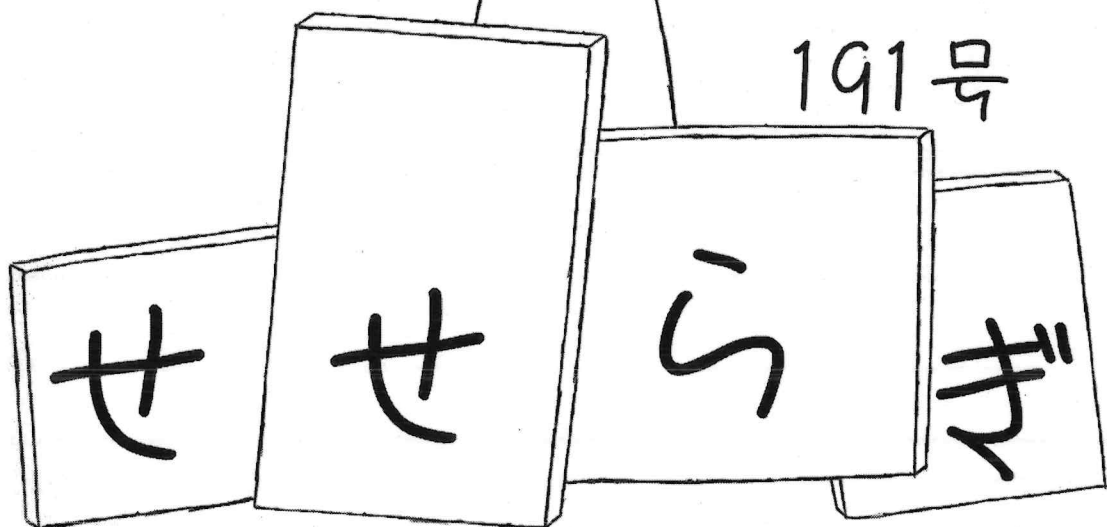




191号



せせらぎ

191号

目次

「天国にて、迷子のお知らせです。」 みみず

「二つの町と一匹の迷い犬と」 レッサーパンダ

「行く春」 薫

「いや、てつきり、」 亀田咲良

「鳥だったある日」 銀平糖

「魔女と探偵」 ラギ

「白燕」 薛曉

「魔法のキッチンカー」 黒澤優花

「友人」 幻想翡翠

「ブラッディ・マリ」 神樂坂

「一番じゃなきや意味がない」 いるかさん

「思い出」 朝霧

「どうでもいいこと」 あんみつ

「折下ふみかの『終わり』」 ラギ

◆ 創作閑話 ◆

...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
52	50	47	44	40	38	32	30	25	18	16	14	10	5
2													

天国にて、迷子のお知らせです。

みみず

ピンポンピンポン。放送開始の音で目が覚めた。何をしてたんだっけ。眠気眼あたりを見渡す。……どうやら自分は雲の上にいるらしい。

「そうか、私、死んだのか。」

刹那。記憶が溢れかえる。病室の無機質な天井を眺めて、静かに、私は。悲しみも驚きも無く、少しの淋しさが胸に残るだけであった。この世に何かを残したわけでもない、そんな人生だったからだろうか。そんなことを考えていると、放送の声が何故か段々大きく聞こえてきて……

「あのー!! 聞いてます!?!」

「え」

「ほ・う・そ・う!!! 呼ばれてますよー!」

キーンと耳をつんざくような声に思わず体が縮こまる。

「あのっわ、わかりましたから、その」

「なんですか!?!」

「近距離でメガホンは使わないで、ください」

「え、あ……ごめんなさい、忙しくてつい……」

轟音が止んで、ようやく顔を上げると、話しかけてきたのはただの女の子ではなく、白い翼を持っており、頭上に輪が付いていて、小柄な……天使のようだった。

「……こほん。いいですか? 私たち天使は、貴女達のような現世からの来訪者のことを正しい方向へと導く役割があるんです。あの世は広く、景色の変化も少ないために、一人で行かれては間違った方向へ進んでしまう危険性があるの」

「はあ」

なるほど。あの世……天国には、本当に天使がいるのか。漠然とした天国のイメージがこうして鮮明になると、なんだか好奇心が湧いてくる。

「じゃあ神様はいるんですか?」

「ああ、いますよ。そんなにお姿は見かけませんが、……って、こんな雑談

している暇無いです。貴女は迷子センターに行かねばならないのです。待ち人がおります故」

『待ち人』。そう聞いても、私には全く心当たりが無かった。

「……?」

「おやおや、思い当たる節がございませんか? まあ、会いに行ってみると意外に分かるものですよ。そういった方々を、私は何度も見てきたものです。」

「何度もって……」〇代くらいの貴女が言うくらいならば、人というのは案外、私のような薄情者で溢れかえっているのでしょうか」

「ああ、いえ。犬基準の物差しで人間を測れないように、人間の物差しで天使を測るものではありませんよ。人の基準で表すとするならば、おそらくではありますが、私は素晴らしい歳、というやつです。」

「そう……」

「質問は終わりですか? そろそろ迷子センターへお連れしたいのですが」

「ああ、すみません。」

構いませんよ、そう言う天使は私の手を取って歩き出した。子供ではない、そう言っただけだが、天使の手の大きさは小さく、小学生くらいの子の手という感じであった。実際のところ、私は子を授かったことが無い身であるから、この『小学生くらい』は憶測ではあるのだが。

天国、というのは、一面花畑であるとか、雲であるとか、様々な意見を聞いたことがある。実際にこうして行ってみると、どれも正解であってどれも完璧な答えでは無いと分かった。雲だけのエリアもあれば、木々や花々の生い茂る場もある……天使の話によれば、私が今から行くのはこちらよりんと発展した、人間界で言う町のようなものらしい。看板やら案内やらが充実しているその町で迷う者はなかなかないらしく、先ほど例に挙げた、自然溢れる場所や雲の多いところで迷子になる者がほとんどだそうだ。

暫く移動していると、天使の言っていた町らしきものが出てきた。飲食店のようなものがあるが整理券を持った人間しか入れないようだ。

「ああ、あれは……飢えが原因で此処に来た方のみ提供されているのです。羨ましいでしょうが、貴女はその条件を満たしておりませんよ。」

「……羨ましくはない、です……」

「あらそうですか。なら良かった」

天使は人間の見た目をしているものの、その正体は元人間、というわけではないようだ。倫理観を持ち合わせているようで微妙に無い。天使の目の黄色に生気が垣間見えることは、出会ってから今まで一切無かった。きっと、私を迷子センターに送り届けた後も、ずうっと先のこれからもそうなのだろう。「あれが迷子センターです。」

「あれが…思ったより普通ですね。」

「人間のフツウやアンシンの感情を指して作られているので。その通りに思えていただけたようで安心いたしました。」
天使は微笑むと、迷子センターへと私を引き連れていった。

「それでは、暫くこちらでお待ちください。雲製の特性クッションをご用意しております。本物の雲というより、子供が想像するような、ふわふわでもふもふで、実体のある雲ですので、ご安心を。」

そう言うとき天使は奥の部屋に入っていた。

待ち人とは、一体誰なんだろう。考えを巡らせてみるとズキンと頭が痛んだ。たまたまなのだろうか。はたまた、私が見て見ぬふりをしているだけなのだろうか。……思い出すのを拒んでいるのだろうか。天国に来て…死んで尚、辛い思い出から逃げようかと？ それはあまりに臆病で、誰かの思いを踏み躪る薄情な奴だ。そんなこと、したくはない。どうせもう死んでいるのだ。どんな結末になろうと、全部知ろう。

そう決意した直後、タイミングを見計らったようなタイミングで、天使が入っていったドアが開いた。中から出てきたのは、女性だった。私とは何十歳も年が離れていそうな、若気な女性。知らない。知らない。人。知らないはずの人。

「あ……え……？」

私は泣いていた。気づけば零れ落ちていた。知っている、この人の……この子のことを。相まみえることさえ叶わなかった、会いたくてたまらなかった、私の人生の最大の幸福と後悔と懺悔。この子は、

「かれん……っ」

……私の子だ。

記憶が流れてくる。大きくなっていくお腹。中からお腹を蹴られて、これは元気な子が産まれるわね、なんて夫と笑いあった。雲一つない青空を、ベランダの椅子に座って眺めて、貴女の幸せを何より願った。こんな平穏が、貴女が産まれてから、一生を終えるまでも続いてほしいなんて願いを、そよ風に乗せて。この子が産まれるのは冬から春にかけて。この世界に、私に、あたたかさを届けてくれる優しい子。どうか無事に産まれてね。そうお腹に呼びかけた。妊娠中期から後期になり始めていた。産まれてくるまであと少し。そう。あと少し、だったのに。

春先、花が咲いた。キンセンカ…カレンデュラとも言う。私の子…かれんの名前の由来のお花。鮮やかな橙色が、植木鉢いっぱい咲き誇った。

私はそれが、綺麗と思えなかった。思うほどの余裕がなかった。私は、カレンデュラの咲き誇るあの日、流産をした。原因は私の体にあった。子宮頸管無力症。自覚症状がほとんどないそう。仕方がなかったと言われた。お医者さんが不備を謝ってきた。違う、私の体が悪かったんだ。あの子を殺したのは私だ。

それからの記憶が曖昧で、覚えていることは、精神的に参った私は何もかもを拒絶していたということ。それが原因で、夫は私から離れて行ったこと。そうやっていたら、病院に入れられたこと。ああ、私が最期に見たあの天井は、精神科病院の天井だったんだ。点と点が繋がっていく。かれんの死が現実になっていく。

目の前のかれんは、どうして成長しているのだろうか。天国でも年を取るのだろうか。それとも、本人の意思で決められるのだろうか。涙で前が見えない。呼吸が苦しい。もう死んでいるのだから、呼吸なんて必要ないのに。感情がぐるぐる絡まり合う。謝らなければ。話さなければ。こんな私でも、貴女のことを愛していたと、伝えなければ。伝えられなかったこと、今なら話せるから。

私が口を開こうとした、その時。かれんが言葉を発した。

「ママ、ごめんね。」

心臓がきゅうつと締め付けられたような気がした。

「どうして謝るの……？」

「私が上手に産まれてこれなかったせいで、ママ、一生を無駄にしちゃった。」泣きそうな声だった。幼さを残した声だった。きつとまだまだ子供なんだ。そりゃそうだ、親に会えずうつと待ってたんだから。そんな子に心配をかけてしまった。申し訳なさそうな顔をさせてしまった。

「お母さんこそごめんね……」

忘れてごめん、とは言えなかった。そうしたらきつとこの子はまた、「私が産まれてこなかったから、お母さんがショックを受けちゃっただけだよ。悪くないよ」なんて言うだろうから。心根の優しい子。この子にたくさんさんの景色を見せてあげたかった。

「お母さんね、今とっても嬉しいわ……貴女の……成長した姿を見られるだなんて、思っていなかったから。神様はお優しいのね。もしかしたら、ただの気まぐれかもしれないけれど、それでも私、すっごく嬉しいわ。」

そうしてようやくかれんを抱きしめた。すると、かれんの体がすう、と縮んでいった。幼児の姿になったかれんは、無邪気に笑っている。

「ママ、ママ。神様が気まぐれでも、私ね、来世でママと会えるって分かるんだ！」

きつと確信は無いのだろう。子供なんてそんなものだ。確信なんて無くて、奇跡は起こりうると信じてやまない。私も願おう。願わずにはいられない。もう一度生きて、貴女に会うチャンスが欲しい。いいや、得てみせる。子供の夢を、希望を、親が叶えなくて誰が叶える。

「お母さんもかれんと会えるって知ってたんだよ。来世、楽しみだね。色々な場所に遊びに行って、色々な体験を試みよう。かれんの好きな食べ物を探して、皆と一緒に食べようね。」

「うん！ パパも一緒にね！」

「……！ そうだね、パパも一緒に、ね」

夫が来たら謝ろう。たくさんたくさん謝ろう。それで、もしも許してくれ

たなら。夫の行く道が他に無ければ。その時は、一緒に生まれ変わろうねと約束を。

「ママ」

「……なあに？ かれん。」

「私のママになってくれてありがとう！」

「……ええ。かれんこそ、私の子になってくれてありがとう。」

迷子センターを出て、一緒に手を繋いで歩く。彼が来るその時まで、ゆっくり気長に親子旅行しよう。大きな雲の海に飛び込んでみたり、お花畑で冠を作ってお洒落してみよう。大丈夫。もしも迷ってもきつと、天使が迎えに来てくれる。その時は一緒に謝ろっか、と小さな手の主に呼び掛けた。

二つの町と一匹の迷い犬と

レッサーパンダ

あるところに、二つの町があった。

一つ目の町は、大きな町だった。しかし、住民はみな、傲慢で嘘つきだった。二つ目の町は、小さな町だった。しかし、住民はみな、優しく正直者だった。大きな町の住民は小さな町の住民を嫌っており、小さな町の住民もそれを知っていたため、お互いの町を訪れることはほとんどなかった。引越しなどをしようものなら、裏切り者のように扱われることもあった。

小さな町に住むナオという小さな女の子がいた。ナオは好奇心旺盛で明るい性格の女の子だった。

ナオは公園で遊ぶことが好きだった。ナオの家が公園の隣にあったため、ナオはよく一人で公園に宇遊びに行っていた。

ある日、ナオは公園でボール遊びをしていた。

ボン、ボン、ボン。ボールが弾む音が響く。

ボン、ボン、ワン、ボン……。

「……………わん？」

ナオは突如混ざったその音を不思議に思い、ボールから顔を上げた。

「わっ、いぬさんだ！」

そこには一匹の薄汚れた、今にも倒れそうなほど弱弱しい様子の犬がいた。

「いぬさん、そんなに疲れて、どうしたの？」

「ワン、ワン、」

「えっ、それでどうしたの？」

「ワン、ワンワン…。」

「ええっ、いぬさんかわいそう…」
小さな町の住人はみな、ある能力をもっていた。それは、動物の言葉を理解できるという能力だ。

はたから見たら意味不明な先ほどの会話も、ナオ目線ではこうなる。

「いぬさん、そんなに疲れて、どうしたの？」

「ぼくは大きな町から来たの。ぼくのことを育ててくれていた家族から捨てられちゃったんだ。」

「えっ、それでどうしたの？」

「大きな町の人たちはみんなぼくのことを冷たい目で見て、ぼくを助けてくれなかったんだ。だから、新しいお家を探してこの町に来たんだよ。」

「えっ、いぬさんかわいそう…」

ナオは悲しそうな犬の様子を見て、ポツリと言った。

「ナオのお家で飼ってあげたいんだけど、ナオのママが動物がちよっと苦手なの。だから、ナオのお家では飼えないんだ。ごめんね……。」

ナオの悲しそうな様子を見て、犬は言った。

「そんなに悲しうにしないで。飼ってくれなくても大丈夫だよ。」

「じゃあ、ナオが新しい飼い主を探してあげるからね。」

ナオは犬を一度家に連れて帰った。

「ただいまー！」

「おかえりー、ナオ。」

「ママー、いぬさんいたー。」

「い、犬？」

ナオの母はナオが犬を抱えているのを見て、ぎょっとした。

「ど、どうしたの、その犬？」

「公園にいたの。ナオがこの子の飼い主を見つけてあげるの。」

「あ……。」

母はやっと事態が読み込めたような顔をした。

「ね、だから、今から町の人たちに、いぬさんの飼い主になってくれないかどうか聞いてくるね。」

「ちよっと待って、ナオ。今日はもう夕方だし、明日にしたらどう？」

「……うん。」

今にも外に出ようとしていたナオは少し落ち込んだ。

「とりあえず、その犬を洗ってあげたらどう？ 汚れたままだとかわいそう」

でしょ？」

「あっ、たしかに。洗ってあげよう。」

ナオは犬を洗ってあげた。

一日ナオの家で過ごした犬は、見違えるほどきれいになり、灰色と茶色を合わせたような色だったその体は、発光しているように見えるほどきれいな白色になった。

次の日になり、ナオは犬の新しい飼い主を見つけるため、町の端から端まで歩き回った。動物を飼うという感覚がまだこの町にはなかったにもかかわらず、町の人々はナオに優しく応じた。その中で、ナオは犬の飼い主にぴったりの人を見つけた。

その人は、小さな町には珍しい、大学生だった。名前は、サクラ。ナオが自身の姉のように慕う、心優しい女性だ。

サクラは、一年前にユウリという名の弟を亡くした。サクラとユウリは、誰もが理想とするような姉弟だった。年が離れていたこともあり、とくにけんかをするようなこともなく、仲睦まじく過ごしていた。

しかし、現実には甘くない。ユウリは、わずか五歳の時、癌であると診断された。発見が遅かったためもう治療の余地はなく、できたとしても延命程度だと言われた。

サクラは弟の病気を少しでも良くしようと、医療を学ぶために大学に入った。しかし、サクラが大学一年生の頃、つまりサクラが医療についての十分な知識を得る前に、ユウリはこの世を去った。

それ以降、サクラはすっかり意欲をなくしていた。しかし最近、ようやく元気を取り戻し始めていた。サクラが犬の飼い主に名乗り出たのも、心に余裕ができたからだ。

ナオは、犬と初めて会った公園で、サクラと犬を会わせた。

サクラは犬の愛らしさにすっかり心を奪われ、緊張に手をふるわせた。

「犬ってすごく綺麗なのね。名前はなんていうの？」

ナオは首をかしげた。

「そういえば、聞いていなかったなあ。」

サクラが驚いたような顔でナオを見たことに気が付かず、ナオは犬と視線を合わせた。

「ねえねえ、いぬさんのお名前は？」

——ワン。

「マロンだって！」

サクラはぎょっとしてナオを見つめた。

「……犬の言葉が分かるの？」

ナオはきょとんとして答えた。

「何を言っているの？ この町で生まれた人なら、誰だって動物の言葉が分かるよ？ サクラちゃんだって、この町の人なんだから、マロンの言葉、分かるでしょ？」

サクラは顔を青くさせた。

「そ、そうだよ。」

ナオはサクラの様子を気にする様子もなく、嬉しそうに言った。

「じゃあ、今日からマロンはサクラちゃんのお家で過ごすっていうことかい？ よかったねえ、マロン。」

順調に決まりそうだったその時——

「ちよっと待ちなさいよ。私の家にも飼い主の募集に来てくれなきや、平等じゃないでしょう？」

突然現れたその女性に、三人（二人と一匹）は、目を丸くした。

ナオは心の底から不思議そうな顔をして言った。

「だあれ、おばさん。大きな町の人？」

「まあ！ おばさんとはなんて失礼な。私はまだ二十六よ。それに、この町の住人です。呼ぶのなら、カナデお姉さまとお呼びなさい。」

「……カナデ？」

苦いものでもかみしめるような表情でサクラがそうつぶやいたが、誰も気

が付かなかった。

「今、大事な時なの。このいぬさんの飼い主が決まったんだよ。」

「だから、それを止めに來たのよ。」

「なんで？」

「この犬は、ただの犬じゃない。」

「マロンだよ。」

「そう。この犬は、ただの犬じゃない。この犬は、動物界の長老よ。」

「ちょーろー？」

「……人間でいう、王様みたいなの。長老の周りにいる人は必ず幸せになれると言われているの。」

「ふーん。どうして分かったの？」

「本で読んだことがあるのよ。長老は光り輝く白色の毛を持っているとね。」

「カナデさんもマロンが欲しいの？」

「そうよ、長老の力で私は膨大な金を手に入れるの。」

「そんなのマロンがかわいそうだよ。」

「動物の気持ちなんて誰も分からないもの。動物の言葉を理解できるような超能力でも持っているなら別だけどね。さあ、その犬を私に渡して。」

「だめだよ、だってマロンの飼い主はもうサクラちゃんって決まったんだよ。」

「……サクラ？」

カナデは真顔でサクラをちらっと見て、固まった。

「……サクラ？ あ、サクラ？」

青ざめたながらも必死で素知らぬ顔をしようとしていることがまるわりのサクラに、カナデの表情が揺れる。

「まさかサクラなの？」

サクラはあきらめたような顔で、カナデの視線を避けながらポツリと言った。

「そうよ、……久しぶりね、姉さん。」

「ねえさん？ サクラちゃん、お姉ちゃんいたの？」

不思議そうな顔をしているナオに、サクラはなんともいえないような表情で

言った。

「そう。実は私は三兄弟なの。私と、ユウリと、カナデ姉さん。」

「どーゆーこと？」

「……姉さんは、私が小さい頃に、両親と大喧嘩をして別の町に引っ越したの。」

「えっ、でも、カナデさんはこの町の人なんでしょ？ どういうこと？」

うつむくサクラに一瞥をなげかけたカナデが口を開く。

「私たちはね、大きな町で産まれたの。私が両親と大喧嘩してこの小さな町に來たすぐ後に、なんでもかは知らないけどサクラたちもすぐにこの町に引っ越してきたわ。」

ナオは驚いた。

「サクラちゃん、そうなの？」

「……そうなの、今まで騙っていて本当にごめんなさい。」

サクラは、ナオの顔が見られなかった。

「どうして言ってくれなかったの？」

「……大きな町の住人はこの町の住人を敵視しているから、この町の住人も同じだと思ったの。……でも、この町の人々はどこまでも優しくった。だからこそ、今更言えなくなってしまうて……。」

サクラはナオから責めるような視線を向けられることを予期し、ギュッと目をつむった。

「へー、そうなんだね。」

「……え？」

ナオのいつもと何も変わらない声にあっけにとられ、サクラはおそろおそろ目を開けた。

「騙されたなんて思ってたないよ。……ああ、そっかあ！ だから、ナオが動物の言葉が理解できることに、びっくりしていたんだね。」

「……私のこと責めないの？」

ナオは笑顔で答えた。

「だって、サクラちゃんはサクラちゃんだもん。どの町で生まれていたとしても、サクラちゃんが今のサクラちゃんのままなら、別に気にしないもん。」

サクラはその言葉に思わず涙腺を緩ませた。

サクラとナオの絆はよりいっそう深くなり、みんな仲良く幸せに暮らしましたとさ。おしまい、おしまい。

……とはならず、

「なんでサクラだけいい思いをするの!?　なんで私だけいつも不幸にならなきゃいけないの!」

カナデの悲痛な叫び声が響いた。

ナオとサクラはビクツとしてカナデにおそるおそる視線を動かした。

「いつもいつもサクラだけみんなに大事にされて!　私のことはみんな気にしないくせに!」

サクラはその止まらない叫び声を聞き、悲しそうに言った。

「お父さんとお母さんのことを言っているの?」

カナデの叫び声がピタッと止まった。

「……あなたに何が分かるの。」

「……お父さんとお母さんはね、姉さんのことをすごく大切にしていたよ。私たちがこの町に引っ越してきたのも、二人が姉さんのことを心配したからだよ。」

カナデはサクラに背を向けた。

「そんなわけない。だって、この町に引っ越してきてから、会いに来てくれなかったじゃない。」

「……会いに来てほしかったの?　姉さんは会いに来てほしくないって思っているだろうなって、お父さんもお母さんもお母さん考えていたんだよ。会うのは我慢して、心の中で応援していよう。もし姉さんが困ったら、その時はまっすぐに助けに行ける距離にいよう、って。」

カナデは肩を震わせた。

「ねえ、姉さん。もう喧嘩をするのはやめようよ。私も、お父さんもお母さんも、姉さんとまた一緒に暮らしたいんだよ。」

「……どんな顔して会いにいけばいいのよ。」

「謝りに行こう。私も一緒に謝るから。」

カナデはようやく振り向いた。勝気な腫が印象的だったその顔は、今は涙で濡れている。

「ごめんなさい、サクラ。本当に、迷惑だったよね。」

「いいよ、別に。……ユウリのお葬式には来てほしかったけどね。」

「本当にごめんなさい。」

「いいよ。今度一緒にお墓に花をもっていこうね。」

「……うん。」

姉妹の会話を、ナオとマロンは仲良く見つめていた。仲直りできたことに安堵し、ナオはマロンに寄り掛かった。

「良かったあ、仲直りできて。ねー、マロン。」

「ワン!」

ナオが寄り掛かっていた体を起こすと、ちょうどカエデがナオたちのほうに振り向いた。その瞬間、カエデはひくつと頬を引きつらせた。

「ちょっと、それなによ!」

カナデが見たのは、服にべったりと白いペンキがついたナオと、ちょうどナオが寄り掛かっていたところだけ白ではなく薄茶の毛になっているマロンだった。それを見たサクラも、顔をひきつらせた。

自分の服とマロンの毛を見比べたナオは、てへっ舌を出した。

「わあ、ばれちゃった?　実は、マロンをきれいに見せようと思って、白いペンキでマロンを塗ったの。ほら、女の人がお化粧するようなイメージ!」

カナデはサクラと目を合わせ、深々とため息をついた。

「じゃあ、その犬は長老じゃなかったってことなのね……。」

「ごめんね、サクラちゃん。白くないマロンはもう綺麗って思えない?」

「……ううん。今までよりもっときれいに見える。だってこの犬は、私と姉さんを仲直りさせてくれたから。」

マロンは嬉しそうに吠えた。

「ワン!」

「じゃあ、マロンはどうするの？ サクラちゃんが飼うっていうことでもいい？ だって、長老じゃないマロンには、もうカナデさんは興味ないでしょ？」

ナオがそう尋ねると、カナデは涙に濡れていた頬を服の袖で拭き、やわらかく笑いながら言った。

「そうね。私にはもう幸せをくれる長老なんていないわ。まあ、とりあえず、サクラが飼うっていうことでいいんじゃない？ そのほうが、マロンも幸せでしょうから」

「ワンワンワンワン！！」

マロンが何かに抗議するように吠えた。

「な、なによ。」

マロンの迫力に、カエデが少しおびえる。

「ちよっと、この犬何言いたいのよ。」

「もうマロンなんていらないー、ってカナデさんが言ったことに怒っているんだって。」

「動物の言葉が分かるの？」

ナオはサクラと顔を見合わせて苦笑いした。

「まあまあ、それはおいといて。マロンは、自分がいらなくなって言われたことに怒っているんだよ。」

カナデはそっぽを向いた。

「……別に、マロンがいらないわけじゃないし。ただ、長老の力がいらないだけだし。」

照れたようにカナデの耳が赤く染まる。

「だってー、マロン。」

「ワン！」

「許してくれるって。よかったね。じゃあ、マロンはサクラちゃんの家で飼うっていうことに決定でいい？」

「うん。」

「ワン！」

「……いいわよ。」

サクラはカナデと目を合わせ、やさしく笑った。

「まあ、ナオは最初からそう言っているんだけど。結局、カナデさんが勝手にやってきて、勝手にけんかして仲直りしただけだったね。」

ナオの空気を読まないその発言に、微笑んでいたカナデの顔が、ナオと初めて会った時と同じような顔に、つまり相当険しい顔に戻った。

「はあ!? なによ、私が悪いって言うの？」

「あつ、そうそれ。ほらー、またけんかになっちゃうよー。」

「なにが言いたいのよ!？」

無表情の小さな女の子に突っかかる大人の女の人という、奇妙な光景ができあがったが、サクラは嬉しそうにそれを見る。

サクラはふと、内緒話をするようにマロンに顔を近づけた。

「ね、マロン。姉さんはお父さんとお母さんと仲直りできてると思う？」

「ワン！」

サクラは今、犬の言葉が理解できたような気がした。

カナデが両親と仲直りすることができた、という朗報がナオのもとに届く時も、もうすぐそこまで来ているのだろうか。

行く春

薫

これはある春の話である。

明日から高校生の衣玖は深夜、なんだか眠れず、窓の外をぼうと眺めている。今日の夜の空気はなんだか冷たい。衣玖は椅子に腰かけ、朝日の光を待ちながら明日にまで迫った入学式の不安をぼつぼつと募らせていた。

朝、起きて鏡を見た。やつれた顔で目の下にはくつきりと隈が張り付いている。明日から高校生になるとは思えない面だ。

中学校では絵を描くことにしか興味がなく、他人とはあまり関わってこなかった衣玖にとって、人間関係でうまくいった経験はあまりない。それゆえに衣玖にとって明日の入学式など地獄に等しいものであった。

入学式当日、衣玖は俯き、重い足を引きずるように歩きながら、駅にまで向かう。電車を待っている間、真となり誰かが立ち並んだ。衣玖の鼻を澄んだ優しい匂いを通り過ぎていった。ふと見上げると、自分と同じ制服を身にまとった柔らかな表情の少女と目が合う。なんだかその横顔が自分には眩しく、すぐに目を逸らした。自分とは、まるで違う、澁刺とした表情だ。その後電車に入ったが、なぜか彼女のことが気になって目で追ってしまう。自分とは全く違う生き物ともいえるものへの好奇心からだろうか。窓から差し込む日の光に照らされる彼女は、まるで絵画のようだった。眺めれば眺めるほど、その美しさに見とれしうのと同時に憧れにも似た感情が不覚にも湧いてしまった。そして、自分と真反対なその少女を見ているうちに、衣玖にはある感情が芽生え始めた。

―彼女を描いてみたい―

電車で揺られていたのは、もちろん昨日から行くのがずっと不安だったあの校舎。

「新一年生の玄関は東です！新一年生は東に向かってください！」

ついに着いてしまった。先生であろう人が入学生生の玄関を案内している。玄関にいくと、ツヤツヤとした新品のローファーがたくさん置いてある。とてもじゃないが、私にあんな可愛らしいものは履けない。自分を追い越して

いく生徒たちはみな、瞳に期待の色を見させている。それは、私のパレットにはないような鮮やかな色であった。

そして気づけばもう教室の目の前にまで来てしまっていた。ほかの子は足早に教室に入っていくのに、私は俯いたまま重い足を持ち上げられずにいた。すると、後ろからまた香る。覚えのある、あの澄んだ優しい匂い。

「何してるの？」

心底不思議そうな顔で私の顔を覗き込む。宝石のように輝くそれと、目が合ってしまった。逸らしたいのに逸らせないそれは私の瞳をとらえて離さない。俯いたまま黙りこくった私を見て、彼女は眉を八の字にしながら心配している。「あの……」ともう一度声をかけられたとき、私はハツとして何事もなかったかのように急いで教室へ入る。勢いで入ってしまった教室の隅を歩き、なるべく目立たないように自分の席に座る。そこから私は入学式が終わるまで、ずっと俯いたままであった。入学式が終わって教室へ戻ってからも私は顔を上げることではなく、クラスメイトの顔も誰一人として覚えていない。ましてや友達など……。

結局、朝起きてから家に帰るまで、私の気持ちが晴れることなどなかった。帰り際、街中のガラスに写った自分を見た。髪は乱れ、ほどけかかっても直されないリボンが見えた。疲れた顔をしている。

家に帰っても食欲は湧いてこない。それどころか睡眠欲すら湧いてこない。明日も今日のような日であるのなら、学校に行きたいなんて到底思えない。何なら明日など来てほしくもない。そうしてまた、衣玖は自分の部屋の窓の外を眺める。窓の外には美しい夕焼けが見える。衣玖は、先月から書き始めていた風景画の続きを描くため、椅子に腰掛ける。実のところ衣玖は、十代向けの美術コンテストに出品するため、先月から毎日風景画に励んでいる。それに加えて、このコンテストでは「中学生の部」「高校生の部」という区切りはなく、募集テーマは油絵というテーマ以外に特に設けられていない。つまり何を描いてもよいのだ。そしてすべての応募者が全学年、同じ枠で競うものである。要するに自分よりも年上の人も数多く参加している中、金賞の枠を狙おうとしているのだ。しかし、自分の描いている風景画はあまりに平凡である。美術を少し齧ったものなら、誰でも描けるような、そんな絵である。もっと、私にしか描けないような、明るく爽やかな絵が描けないものだろうか。そうしてまた、手が進まずにもう一度窓の外に目をやる。田舎でし

か見ることのできない美しい夕焼けの風景がそこにある。どんなに疲れているように、いつ見ても綺麗なものは綺麗な。

沈みかかっている太陽をぼんやり見つめている間、なにかこの風景画に描き加えてみるか、ともう一度ペンを持ち直す。やはりこの絵はなんだか暗く、味気ない。だがそれは、逆手に取ればもつと爽やかで華やかなモチーフの一つでも書き加えれば、風景と対照的になり、その華やかなモチーフがより際立って見える一つの技法としても使える。でも、この平凡な風景に何を加えたら良いのだろう。その時ふと、衣玖は今日の朝の出来事を思い返す。駅に佇んでいた絵画のような少女のことだ。その表情や声、仕草などはすべて、自分の求めていた「爽やかで華やかなモチーフ」であった。そのことに気付いた衣玖は、すかさずラフの紙にペンを走らせる。自分の内からアイデアが湧き出てくるのを感じた。でもいくらアイデアが浮かばうと、本人の許可なく正式なコンテストに作品を応募することはできない。そうして衣玖は心にある気持ちを決心させた。

衣玖は絵にしか興味がない。だがそれゆえか、絵が関わると人を疑うほどの行動力を発揮させるのだ。

朝、起きると限は少し薄くなっている。昨日は夜遅くまで紙にペンを走らせていたせいかよく眠れた。今日は気分も良いし朝食もちゃんととれるような気がして、久しぶりにパンの袋を開けた。楽しそうな笑い声が聞こえるニュースを見ながら、衣玖はぼんやりと考える。彼女にこんなお願いをしても大丈夫だろうか。いや、今回のコンテストで絶対に金賞を取るためには彼女の存在が必要不可欠だ。私はこれまで何度も何度も美術コンテストに参加してきたが、一度たりとも金賞には手が届かなかった。金賞を掴み取るためには、すこしの勇気だっていとわない。

次の日の朝、衣玖は緊張した面持ちで玄関の扉を開いた。昨日とは別の意味で重々しい足を駅まで運んでいく。その瞳にはゆらゆらと朝の太陽が映し出されていた。駅にはやはり、日に照らされた、絵画のようなあの少女が佇んでいる。今日は友人らしき人と楽しそうに話しながら電車を待っている。もう友人ができたのだろうか。自分の現状との格差におびえつつも、その爽やかな横顔を目に見ながら隣を通り過ぎていった。

でも一体どうお願いしたら彼女の許可が得られるのだろうか。ふつつう自分

の姿が描かれた作品をコンテストに応募させてほしいなんて、受け入れる人のほうが少ない。

そんなことを考えているうちに、電車が到着し、彼女に話しかけるタイミングを見失ってしまった。

お昼休み、衣玖はご飯を食べ終えてお弁当を片付けているその少女に今しかない、と足早に近づいていく。結局、頼み方の最適解は見つからなかったが、許可をもらえるまでお願いし続けるのが一番手っ取り早いのかもしれない。一步、一步と近づき、そつと声をかける。

「あの」

「ん？」

私の声掛けに間髪入れずに返事をくれた彼女の瞳は、今日もやわらかい光を映している。

「お願いがあつて……」

「美術コンテストに応募する作品の人物のモデルになってほしい」

「……私が？」

その声色と表情で、彼女がこれからどんな返事をするのが、すぐに分かった。

今日の放課後、誰もいない教室に入ると一人の少女が佇んでいる。まさか二つ返事で許可がもらえ、写真を撮らせてもらえることになるなんて思いもしなかった。こういった彼女の人物が、まさに周りから好かれる一つの要因なのだろう。

ゆつくりと振り向いた彼女の笑顔に、思わず霧散しそうになる。とりあえず、いろんなアイデアを出せるようにするため、様々な角度から写真を撮らせてもらうことにした。真顔で良いと伝えたため、カメラを向けてから彼女はあのやわらかい表情を消した。しかしアルカイック・スマイルにも見えるその表情は、まさに私が描きたかった「モチーフ」そのものであった。シャッター音だけが鳴り響く静かな教室で、シャッターを切るたびに、描いてみたい構図がどんどん思い浮かび、私の内から創作意欲がとめどなくあふれてくる。こんな感情はいつぶりだろうか。昨日まで自分の居場所なんてなかった、この教室が、今は私だけのスタジオであり、彼女だけのステージに見

えてくる。

「このくらいかな。」

私がそう告げたとき、彼女はまたいつものやわらかい笑顔を取り戻した。そうして撮影は思っていたよりもあっさり終わり、軽くお礼を伝えた後、私はそそくさと帰りの準備を始めた。すると先ほどまでずっと沈黙を保っていた彼女に呼び止められた。

「せっかくなら一緒に帰らない？」

帰り道、夕焼けが二つの影を作る。初めて目にした、朝日に照らされ遠くで佇んでいたあの少女が、今は自分の隣で頬に夕日を落としているなんて、昨日の自分には想像もできなかっただろう。初めて間近で見るその横顔は、あまりに凛としていていつもとは違う存在感がある。

「そういえば名前、聞いてなかったね。」

目が合うや否や、突然彼女はそう口にした。

自分の名前を教えると、彼女も自分の名前が遥香であると教えてくれた。

名前までが爽やかで温かい、彼女らしい綺麗な名前だ。

彼女と歩いているうちに、彼女から質問が投げ込まれてくるようになった。本当は自分のことなんてあまり話すつもりはなかったが、彼女の話しやすい雰囲気になれ、柄にもなく自分事を語ってしまった。自分が入学式当日仮病を使ってしまったこと、絵にしか興味がなくあまり他人と関わってこなかったがために高校生活が不安であったこと……。そうして話しているうちに、駅に着くころには、今まで誰とも連絡先を交換してこなかった私は彼女の連絡先をスマホに登録していた。でも一つ、自分が本当は、自分の絵に自信が持てずにいるということだけは、口にするのができなかった。あんなお願いをしておいて、そう簡単に言うことは、とてもじゃないができなかった。なにより、自分が学校においていただけでなく、絵に関してもちっぴけな存在であるなど、口にすることすら恐ろしいのだ。

やはり、自分はちっぴけな存在であることが彼女と話していると嫌なくらい思い知らされる。駅で彼女と別れた後、彼女に話せなかった自分の心情がうつすらと心の裏面に浮かび上がってきた。今まで絵にしか興味を持たず、絵だけに情熱を注いできた。休み時間にまわりの人たちが仲良く話している

中、自分だけは教室の隅でただただ絵を描くことに没頭していた。そこまで、そこまでして努力してきた結果が金賞に届かない凡人の座……。考えただけでゾッとしてしまう。おそらく私が金賞にここまで執着する本当の理由は、自分の描いた絵が認めてもらえるからというよりも、自分の絵が認められなければ、今までの努力や自分の意義がなくなってしまうからだろう。つまりは、「金賞を取りたい」というよりも「金賞を取れば困る」の方が正しいということだ。

家に帰ってから衣玖は彼女に撮らせてもらった多くの写真を見返した。どれもこれも、見ているだけで頭の中にアイデアが降り注いでくる。衣玖はただただ自分の頭に次々と浮かんでくるアイデアを紙に描いていく。もつと、もつと目を引かれるような構図で、儂い色味で……。そう何枚も何枚もラフを描いているうちに、ついに、自分が思い描いていたような構図を描きだすことができた。

それから衣玖は、朝起床しては絵に取り掛かり、学校から帰ってきてはまた絵に取り掛かる、そんな日々を送るようになっていった。

―― 1 か月後――

ベタ、ベタ、と油絵具をキャンバスに重ねる音が部屋の片隅から聞こえる。ベタ。そこで先ほどまで聞こえていた音が突然止まる。ふと顔を上げると、目には自分がずっと励んできた努力の結晶が飛び込んできた。そして、自分がずっと求めていた絵が、そこにはあった。

―― 完成だ――

衣玖は、直感でそう感じた。ついに、求めていたモチーフを自分の手で書き表すことができた。自分が描いたとは思えないほど神秘的でかつ流麗な美しい絵が、衣玖の潤んだ瞳に映し出されていた。ようやく描き終わったその絵をまるで宝物のように、いや、衣玖にとっては宝物であるそれを丁寧に額縁に入れる。もう真夜中であつたので、衣玖は明日配送できるようにその日のうちに準備を済ませた。

次の日の日曜、衣玖はさつそく、その絵を郵便局へ持っていき郵送した。当たり前だが郵送してからはもう絵に手を加えることはできない。衣玖はただただ金賞という一点の願いを込めて郵便局を後にした。

また次の日の月曜、衣玖は学校につき、遥香とあつた瞬間、開口一番に「完

成したよ」と真剣な表情で伝えた。

遥香は驚いた様子を見せ、「見たい」と言った。もう郵送してしまったことを伝えると案の定がっかりした様子であったが、ぽつりと一言、「美術館で飾られているところが見てみたいな。」と零した。だが、私はまだそれを約束にすることはできなかった。絵を完成させられたことで、前よりも少し自信がついたように感じていたが、それでも少し、ほんの少しの不安が残っている。だが自分でさえ自分を信じるのができなければ金賞など掴みとれないだろう。衣玖はそう自分に言い聞かせて玄関を後にした。

――か月後――

ついに発表の日が来た。

一か月が経ったとは思えないほどにあつという間であった。美術コンテストのサイトにて発表が行われるらしい。だが衣玖はまだ、勇気が出ずサイトを開けずにいた。

ただワンクリックするのにこんなに勇気がある場面など、これまでにあつただろうか。

――ピンポーン。

衣玖一人の静かなリビングに電子音が鳴り響く。

誰だろうと思いつながら、おずおずと玄関のドアを開けると、そこには息切れをした遥香の姿があつた。

「もう、発表見ちゃった!？」

ゼエハアと肩で息を立てる彼女は焦った様子で私に問いかけてきた。

「いや、これから見ようとしていたところだけ……」

「!よかった……」

こんな朝にどうしたのだろうか。

とりあえずこの頃の朝は冷えるので、突然来た彼女を不思議に思いつながら家の中に入れる。息を整え終わった彼女は、私の気持ちを察して、今の状況を説明しだした。

――要するに、今日が発表の日だと起きたところに知り、一緒に見たいから急いでここへ来たのだと。そういえば一緒に帰ったあの日、私がなんの美術コンテストに参加しているのか、自分がどこら辺に住んでいるのかなどの情報をつい話してしまったことを思い出す。でもなぜか先ほどまで私の心の底に広がっていた冷たい不安が温まっていた。彼女は、私のあとワンクリックでサ

イトを開けるパソコンの画面に目をやる。

「このサイトが発表のサイト?」

彼女がそう口にしたので、私は側により、「そうだよ。」と言おうとしたとき、

――ポチ。

「あ」

間違え……

「!」

――画面には、大きく「金賞」の二文字が映し出されていた。

その文字を見た瞬間、右目からは一粒の涙が零れ落ちた。私は口をうつすらと開けたまま、ただただずつと求めていたその二文字を見つめていた。

澄んだ優しい香りのする隣から、「美術館、二人で行こうよ」と、やわらかい笑顔で誘ってくれた。――まるであのときの、写真を撮らせてもらった帰りに「一緒に帰ろう」と笑顔で誘ってくれたように――

私は、初めて自分から彼女に目を合わせ「ありがとう」と伝えた。

今の私は、もう彼女を「美しいモチーフ」ではなく、「二人の友人」として見ていた。

東京都のある美術館。窓枠に切り取られた景色では、瑞々しい青葉が初夏の風に舞っている。神秘的でかつ流麗な美しい油絵に二人の少女が立ち並び眺めている。

一人は恍惚と、一人は満ち足りた穏やかな表情である。

二人の少女が眺めているその絵画の名は、『初めての春』であつた。

いや、てつきり、

亀田咲良

「私」が幼いころ読んだ赤毛のアンにお気に入りの一説がある。それは、「曲がり角を曲がった向こうにはなにがあるかわからないわ。でも、きつと一番良いものに違いないと思うわ。わたし、曲がり角にわくわくしているわ。」その分を読んだとき、当時の「私」自身もわくわくした覚えがある。角を曲がった都築には必ず続きがある。その世界は途切れずに水平線のように続きがある見えない世界には私がまだ知らない未知の世界」広がっていることを。子供のころの「私」はそう純粹に信じていた。そして「私」はその場面の夢を何度も見ていた。白濁色の道を歩いていて。風が吹き、イヌホオズキが咲いていた。「私」は静かな道を歩いていてその先には必ず角がある。夢の中「私」は迷わず曲がる。その先にはきつと何かがあるのだと心から信じていた。恐怖を感じたことは一度もなかった。「私」曲がる瞬間を一番愛していた。しかし、今となつてはそのときの「私」言いたい。「ワクワクするどころが、悲鳴を上げて逃げる道もあるのだ。」と。今

の私はその感覚を失っている。残業があり職場から自宅へ帰った矢先にその出来事は起こった。自宅のマンションは繁華街のはずれにあるため比較的治安の悪い街。残業があり遅くなった帰り道。この町は夜が最も輝く瞬間だ。ガラが悪い人もいるので注意が必要。どこか通れば全くわからない土地にながっているような摩訶不思議感が出ていた。しかし、帰り道は決まっている。会社を出て、居酒屋の前を通り、大通りを渡り、住宅街へ入る。そしてその途中に一つだけ必ず曲がらなければいけない角がある。古いのか新しいのかわからない電柱と、低い堀。少し見通しの悪い「字路」。昼間は何にもない。だけれど、日が沈めばそだけ深く見えるのだ。なぜかって、理由は分かっている。建物の位置と街灯の関係で、角の直前から向こう側が完全に死角になる。視界が一瞬途切れる。それだけのことだ。だが、その「一瞬」が妙に意識に残る。最初に違和感を覚えたのはいつだろうか、ああ、きつと残業帰りの夜だっただろう。時間は夜10時をとくに過ぎていた。住宅地に入ると人の気配はほとんどなくなる。そのとき、少し前を人が歩いていた。真

っ赤なドレスを着ていた。この街をあらわしたような服装だった。そして夜に溶け込んでいるように見えた。距離は20メートルぐらい。そのまま歩けば、同じ角を同じ角を曲がることになるだろう。女はそのまま角へ向かっていった。私は後ろを歩く。そして、視界が途切れた。いつもと同じ。そのとき短く何か破裂したような音がした。深夜に響く、硬い音だ。一度だけではなかった、もう一度。私は角を曲がった。そこには、あの女が立っていた。真っ赤なドレスのままゆっくりと振り返るところだった。足元に、男が倒れていた。男はスーツ姿で不自然」に立っていた。真っ赤なドレスでも、ごまかせないくらい血色。そして、拳銃。私はその光景を完全には理解しなかった。理解する前に女と目が合った。その女は異様なほど整った顔だ。しかし、私は、それを美人と形容していいのかわからなかった。現実感がわかないせいなのか。しかし、彼女の美しい瞳に移っているのは私ではなかった。私は動けなかった。声も出ずただ固まっていた。次の瞬間視界が途切れた。きづいたらときにはだれもいなくなった。ただ、いつもの角がある。私はしばらくその場にたっていた。頭の中でさっきの光景をよりできなかった。見間違いだと思うことにした。次の日、会社で話題になった。「あの角で、殺人事件があったらしいよ。」同僚に詳しく聞いたら時間も場所も一致していた。あの角だった。その時私は理解した。私は見えない時間をみたのだと。角の手前で視界が消えるわずか数秒。その間に起きたことは完全には見えない。だが、結果の一部だけが残るそれ以来「私」は

は彼女を忘れられなくなってしまった。そして数日後、また、同じ帰り道。角の手前に、あの赤いドレスの女がいた。あの日と同じ距離。同じ歩き方。その瞬間、私は理解した。これはきつと一度きりじゃない。女は迷いなく角を歩く。私は王。視界が切れる。その時私は、初めて歩みを止めた。角を曲がらなかった。だが、次の刹那。角の向こうから、声がした。「また見てる。」大きく、はつきりと。見えないけれど、それでも「私」を認識している様子だった。私は動けなかった。そのとき子供のころの夢を思い出した。何度も見た、あの角。迷わず曲がることを楽しみにしていた「私」。あの時私は知らなかった。だが今は違う。あの夢でさえ、私はすでに何かを見ていたのではないか。ただ理解ってないだけで。足元に違和感を覚えた。靴の先に泥のよ

うなものがついていた。いつついたのさえわからない。だがそれを見た瞬間確信した。これは今ついているものじゃない。ずっと昔からついているものだということ。私はもう、一度も見えていない側」には戻れない。その夜、家に帰った後、指先に奇妙な湿り気がした。その瞬間頭に何かがはまった。言葉にするのは難しいが、まるでパズルの最後の1ピースがはまった感覚。数学の問題でひらめくあの感覚にちかい。私は確かにあの角を曲がっていた。だが同時に、過度の向こう側の景色を「私」は知っている。見ていないはずのものを思い出せない。這いつくばるように洗面所へ行く。まだメイクをおとしてない、私は、鏡を見た。そこにはいつもの「私」が映っていた。だが一瞬増がぼやけた気がした。風呂も入らないまま布団に入りまどろんだ。夢を見た。あの道、あの角、そして私は曲がる角の前に立っている。だが同時に、角の向こう側にも誰かが立っている。真っ赤なドレス。その姿は、私だった。視界が途切れる。気づくと、「私」は向こう側にいた。足元に倒れているのはだれか。向こう側には、こちらを見ている「私」がいる。私は口を開く「またみている」目が覚めた。手の中に、何かの感触だけが残っている。帰り道、私は今まで角の前で立ち止まる。だがもうわかっている。止まることに意味はない。すでに「私」何度もその道を通っている。そしてきつと、向こう側に何度もたっている。ただ、それを思い出せないだけで。

鳥だったある日

銀平糖

目を覚ますと、鳥になっていた。見渡すと、知らない住宅街。築十年以内くらいの新しい家が多いなかに、レトロな家がちらほら。よく手入れされた畑も見える。自分の羽をかなりの違和感もありながら、ぐっと広げてみると、青と白のグラデーションで、真珠のような光沢がある。この青はスカイブルー、とかいう色だと思う。なかなか綺麗じゃないか。飛ぼうと思うってバタバタ羽を動かしてみろ。

バサバサ

「あつ、飛べたつ」

ぼちよ

「…」

少し飛べたと思ったら、放物線をちよつと伸ばしたくらいの軌道を描いて、地面についてしまった。

バサバサ

バサバサ

少しは飛ぶ、跳ぶことはできるのだが、すぐに地面に戻ってしまう。飛び方が悪いのかと思い、試行錯誤しつつ、何回か挑戦するうちに、なんだか疲れてしまった。

仕方ない、歩くか。

知らない町の空を飛んで、上から見てみたら、どんなに楽しかろうとも思いうけれど、飛べないものは仕方がない。歩いて町をまわってみることにした。

少し歩くと、黄色いカバーを付けたランドセルを背負った小さい子どもたちが、肩紐が外れたランドセルを背負った大きい子どもたちに率いられて歩いている集団に行き会った。

ちよこちよこ歩み寄ると、一人の子が私を指差して言った。

「あ、なんか青い鳥が歩いてる」

「ほんとだ、かわいいね」

「きやはは」

朝の登校中の小学生に交じって一緒に歩く。この町には少子高齢化の日本といっても、元気な子供がいっぱいいて、活気があるようだ。

小学生たちの「かいけつゾロリ」の何が面白かったとか、なんとかという話を

ぼんやりと聞きながら、少し歩いていくと、住宅街を抜け、商店街が見えてきた。

うーん、どうしようかな。

小学校まで子どもたちについていこうかと悩んだけれど、商店街のほうが気になったので、小学生と別れて、商店街の道に進んでみることにした。

「あれ、鳥さんそっち行くの。じゃあね。ばいばーい」

「ばいばーい」

大きな手を振って見送ってくれた。

ピロロ

「またね」というつもりで、鳴いておいた。きつと伝わっているだろう。

まだ朝だから店は開いていないだろうと考える冷静な自分と、なにが売っているのかとわくわく胸を躍らせる自分と半々である。商店街に入ると、意外にもシャッターが上がっている店がほとんどで、朝からやっている店もあれば、店を開く準備をしている人もいる。

ルンルン歩いていると、かわいらしいアンティークな雰囲気のお店を見かけた。

店の入り口では複数のモビールが朝日に照らされてキラキラと光りながら、初夏の爽やか風を受けてシヤラシヤラと音を奏で、優雅に揺れている。なんて素敵なお店だろうと思って、お店に吸い込まれていきそうになったそのとき、ぬつと白い毛玉が前を横切った。

ひっ

猫だ。実は猫に遭遇するのは本日三回目。小学生たちに会う前に一回と、一緒に通学しているときだ。この短時間で三回の遭遇。この街には野良猫がたくさんいるようだ。通常、小さい鳥にとつて、猫は天敵だ。猫はよく鳥を弄ぶ。あ

つちはじゃれあいのつもりなのかもしれないけれど、こつちにしてみれば、命懸けのデスゲームだ。お腹が空いていると、食料にされることもある。しかし、誰かが餌をやっているのか、この猫は食には困っていないらしく、鳥の私を食料として狙う気はないようだ。それに執拗にじゃれてこない。もしかしたら、私が飛べないので、動きがつまらないと思っただけなのかもしれないが、私をヒヤヒヤさせながら、ただ前を通り過ぎるだけである。

あ、こちら辺は生鮮食品関係のお店か。肉屋のおばちゃんと八百屋のおばちゃん

が店の準備をしながら、世間話をしている。

「あら、青い小鳥さん。めずらしい」

肉屋のおばちゃんが言った。

「あら、青い小鳥さん。めずらしい」

肉屋のおばちゃんが言った。

肉屋のおばちゃんが言った。

肉屋のおばちゃんが言った。

「ほんと。かわいらしい。そういえば、青い鳥って幸運を呼ぶんじゃないか?」八百屋のおばちゃんに私が私に小松菜をホイホイと向けながら言った。

「まあ、そうなの。今日も何かいいことがあるといいねえ」

肉屋のおばちゃんと八百屋のおばちゃんは楽しそうに会話するけれど、店を準備する手際のよさはそのままだ。鶏肉の品出しをしていた肉屋のおばちゃんに「いいことがありますように」なんて言われると、なんだか脅迫のように聞こえる。これは、肉屋のおばちゃんに幸運をもたらさないと、明日そのクローラーケースに並ぶのは、私なのでは…。

そんな恐怖を薄々と感じながら、できるだけ速足で肉屋と八百屋の前を通り過ぎた。

あ、三毛猫。本日四匹目だ。さっきの猫もそうだったが、どの猫も西のほうに向かっているようだ。西のほうで何かあるのかな? 気になるし、付いていってみよう。

もちろん猫の速さについていける訳もないので、猫を遠くに見ながら、西のほうに向かっていく。

ザア

道横の建物がなくなった瞬間、潮の香りとともに、心地よい風が吹いた。

青い海が広がっている。

海の中に緑の小島が見える。

海町だったのか。そりゃ、猫も多いわけだし、餌に困るはずもないよね。

振り返って、陸地のほうに目を向ける。浜辺沿いの道を目でたどってさらに先

を見ると、鮮やかなオレンジ色が森の緑の中にぼつぼつと見えた。果樹園が何かがあるようだ。

ニャーニャー

防波堤の上で猫が何かしているようだ。上で何をしているかが気になって、防波堤のそばに生えていた雑草にしがみついて、なんとか防波堤の上に行く。

上には想像以上にたくさん猫がいた。十五匹くらいはいるだろう。

チュンチュン

「こんにちは。猫さん何しているの?」

もう、猫を恐れなくてもよさそうだと思って、勇気を出して話しかけてみた。

「あら、こんにちは。小鳥さん。今やっているのは、ちよつとした集会みたい

な感じよ。小鳥さんのほうは、新顔ね。いい色した羽じゃない」

「ありがとう猫さん。あなたの真つ白な毛もとてもきれいだよ」

「ありがとう」

「猫さん、ところで、この町はどんな町だい。知らないうちにこの町にいたものでね。少し、教えてくれると嬉しいな」

「地理的なことを言うと、ここは内海沿いの町よ。盛んなのは、オレンジ栽培。このオレンジはすっごく甘くておいしいの。農園に行ったら、運が良ければ、農家の人がわけてくれるわよ」

「へえ、そうなんだ」

「あとね、この町を私的に解釈すると『ふるさと』かしら。誰が来てもそんな風を感じると思うわ。猫も人も優しいし、温かいのよ。安心する町、そうとも言えるわ」

「素敵な町なんだね」

「本当にそうなの。この町では時間がのんびり流れている。ぜび、ゆっくりしていったらいいわ」

チュンチュン

ニャーニャー

明日どこにいくか分からない身ではあるけれど、経験上、私がこの町にいたいと強く願えば、きつとしばらくはこの町にいるだろう。

ほかの猫にも話しかけてワイワイしていると、中学生らしい男の子二人が自転車を押してこっちにやってきた。

「あ、猫と鳥が集会を開いている。楽しそうじゃん」

「何しゃべってるんかな」

「おなかすいたーとかじゃない?」

「それはお前が思っているだけだろ」

「ばれた?」

「ハハハ」

ザア

潮風が心地よい。この後は、オレンジ農園のほうにでも行ってみようかな。あ、この町のこともっと知りたい。

明日もきつとこの町に。

魔女と探偵

ラギ

汚れた街の片隅にて。

ドンドンドン、と扉を叩く音が響いていた。

「たんでーさん！ たんでーさん！！」

「…うるせえなあ…なんだよ。」

ガチャリとドアが開いて、姿を現したのは長い青髪的青年。

眠そうに目を擦りながら、ドアを叩いた子供を酷く不機嫌に睨み付けるが、子供は気にもせず青年に話しかける。

「おねがい！ たのみたいの！」

「何を。」

「ひとさがし！」

聞いたとたん、青年の顔が嫌そうに歪む。

青年はひどく嫌そうに言い放った。

「なんでだよ…面倒くさい。断る。」

しかし少年は諦めなかった。

「おねがい！ たんでーさん、いつもひまなんですよ？ いいじゃん！ ほかのひとはきいてもくれないんだから！」

「暇じゃねえ」

「いっつも寝るかふらふらしてるだけでしょ！ ひまじゃん！」

言い募る少年に、うんざりしたような顔をしながら、洪々といった感じで青年は答えた。

「…聞くだけなら、聞いてやる。」

「ほんと!?」

ばあつと顔を輝かせ、少年は飛び跳ねて喜んだ。

「…んで、誰を探してほしいって言うんだ。」

青年の問い掛けに、少年は喜々としてその名を口にした。

「【予言絵の魔女】！」

「…」

少年は気付かなかった。

「あのねえ、きのうね、魔女がかいたっていう絵をみたの！ すっごく綺麗でね、ぼくも魔女みたいになりたいの！ だから、魔女にあつて絵をおしえてもらうの！ ねえ、魔女をさがしてよ！」

青年の不機嫌そうな顔が、別の意味で歪んだのを。

「…それ、他の人にも言ったのか。親とか。」

「いったよ！」

「周りの人間はどう言った。」

「どう、つて?…そっか、つて。それだけ。」

「…お前、俺が断ったらどうするつもりだったんだ。」

「じぶんでさがしにいくよ！ どこだって!!」

青年の顔はさらに歪んだ。

「…」

しばしの沈黙。

やがて、青年は口を開いた。

「…魔女の姿を見たものはいないとされている。何処に住んでいるのかも知られていない。手がかりは名前だけ。ないに等しい。」

「え？」

少年はきょとんとした顔で青年を見上げた。

「見つかるなんて保証はどこにもない。見つからない可能性の方が遥かに高い。」

「…それでも、会いたいのか。」

「…うん！」

「なら、この依頼、受けるだけ受けてやる。だが長くても三ヶ月で打ち切る。見つからないと思え。」

「はい…」

少年は青年の気迫に気圧されたのか、たじろぎながらも返事をした。

「わかったなら帰れ。」

青年はそれだけ言うと、扉を閉めてしまった。

扉が完全に閉まる寸前、少年は我に返ったように戸の隙間に向かって叫んだ。

「あつ…ありがとう！」

「…別に。」
返事はそつけなかった。

扉を閉め、溜息を一つ吐く。

と、頭上から声が降ってきた。

「どうして断らなかったの？ 零。」

「…ノア。」

声の主は共に暮らしている猫のノアだった。

猫と言つてもただの猫ではない。

猫^{ニャウ}と呼ばれる、猫の妖である。

黒い毛並み、ゆらゆらと揺れる尻尾。見た目は完全にただの猫そのものである。

…尻尾が三本でなければ。

ノアは高い妖力を持つ妖で、人に変化することもできる。

普段は俺の飼ひ猫のように振る舞いつつ、時には人の姿を取ったり、自由気ままに過ごしている。

人の姿をとれば銀の髪にエメラルドの瞳の、麗しい青年なのだが、天然且つサイコパスじみた一面を持つ、なんとも表現しがたい性格なのである。

「あの子、『自分で探しに行く』って言つてた。『どこだって』とも。」

「そうだったね。」

「確かあの子は、言つたらやる性格だったはずだ。それがどんなことでも。」

「…断れば、一人で探しに行くだろうって？」

「…あの子の両親は、若干、あの子を放置気味だからな。」

「この街では、幼い子どもなんて養うだけで大変だからね。夫婦共働きで、なかなか構つてやれないのはしかたないといえましょう。それを差し引いても、ちよつとね。」

「…まあ、どちらにしろいなくなつてもすぐには気づかないだろうし、まさか『魔女』を探しに行くなんて思わないだろうからな。」

「そうだね。」

ノアのエメラルドの瞳が俺を見上げる。

「それで、どうするの？」

「…」
俺は答えなかったのか、答えられなかったのか。

てし、てし、てし…
足音が止まる。

「…」

広い敷地を持つ屋敷の、北に位置する暗い部屋の中で。

暗闇に溶け込みながらエメラルドの目を光らせ、無造作に置かれた彼らをただ見つめる人影…いや、猫影があった。

「…こんなに、綺麗なのに。」

ノアの視線の先には、数多の絵があった。埃除けの布を被せられたものや、乾かしている最中であろうもの、描きかけで放置されているもの…

それらは、彼の目には時間の狭間に忘れ去られてしまったように見えた。

「忘れることも、終わりにしてしまうこともできずにいるなんて。」

朔夜零。東京の片隅で探偵事務所（という名の何でも屋）を営む青年。

類稀なる頭脳と人間離れた特別な力を持ち、それらの力を用いて街の人々を手助けして暮らしている。

祖母譲りの予言能力、『鷹の眼』とも称される、常人の目には見えないものさえ『視る』力。

それらの力は、人ならざる力を持つ妖である、俺たちからしても凄まじい。能力のことで幼少期に苦労したこともある、人付き合いも愛想も悪いが、優しい心を持つ、不器用な子ども。

零の周りには、人も妖も、変わった者たちが集まる。俺も含めてね。

今日は晴れた。

「今日は何をするんだ？」

問いかければ、零は面倒そうな顔をしながら振り向いて、答えた。
「草むしり。最近、庭の管理やつてなかったから。」

「ハルカたちが来てくれてたけど、それでもけっこう生い茂っちゃってるよね。」
「そうだな。…うちの庭はひどく広いからな。」

庭仕事の恰好をして外へ出ていく零を見送り、後から追いかけた。
手(前足)が汚れるのは嫌だし、人の姿をとってまで手伝ってやろうとは思わな
いけど、ちょっとだけなら手伝ってやつてもいいだろう。

上から声が降ってきた。

「よっ」

「…千颯？」

「おひさ。」

「…久しぶりだな。こんなところにいるとは思わなかった。」

「こんなところって…ここお前の家じゃん。おかしくはなくない？」

「俺の家にいるのはそこまでおかしくないが、お前が東京まで出てくるなんて、
珍しいじゃないか。こんな都会みたいな場所、お前好きじゃないだろ。」

「都会みたいじゃなくて、都会なんだけど…そりゃ、都会は嫌いだよ。山と水
に囲まれている方が好きだけど。」

「じゃあなんでわざわざ500キロも離れたここまで来たんだよ。」

「なんでって…わからないの？」

千颯は心底驚いたような顔をした。

「お前、変なところで天然とか、ズレてるというか…ノアもそう思わん？」

「まあ、変だよな。」

「ノアに言われたくない。絶対ノアの方が天然だろ。」

「そうかなあ。」

「そうだろ。…で、結局なんで来たんだ？」

「決まってるだろ。お前に会いに来たんだよ。」

「…試合しに来たのか？」

「…お前って、本当に戦闘民族だよな…まあ私も人のことは言えないんだらう
けど。」

「お前が言うのか、って話ではあるよな。」

「そうなんだけど…そうじゃなくてさ、ただ会いに来ただけなんだよ。」

「用事とかは何もなしに、ってこと？」

「そう…さすがノア！」

「…まあいい。それで、泊まるのか？」

「うーん…お前が良ければ。いきなりアポも取らずに来ちゃったからさ。」

「俺はかまわない。ノアは？」

「俺も大丈夫。っていうか、ぜひ泊まっていきなよ。」

「じゃあ、ありがたく。…そうだ、せっかくだし、また絵を見せてよ。」

「…ああ。」

一度中に戻る、と言って去っていく零の姿を眺めながら、千颯はノアに囁いた。

「…ねえノア、零、何かあったの？」

「ああ…こないだ、依頼を受けたんだよ。とびきり難しいやつ。」

「零にとつて難しいって…どんだけなのよ、その依頼。」

「別に、依頼自体は難しくないんだ。ただ…零本人の心の整理が必要というか。」

「ほう。」

「…【予言絵の魔女】を探してほしい、って依頼。」

「それは…たしかに、今の零には難しいだろうね。」

白石千颯。東北地方のとある山に住む、零の友人の一人。

様々な武術を修め、力を磨くことを好んでしている、変わった少女である。

その経緯もあって、零には少々喧嘩っ早いと思われているが、千颯曰く、零も
大概である。

…ノアたちに言わせれば、実際はそうでもなかったりする、というか、どっち
もどっちらしいが。

「今日はアポも取らずに突撃しちゃったし、料理は私が作ってやるよ。零は休
んでな。」

腕まくりしながら、千颯が言った。

「逆だろ。俺が、客人であるお前をもてなすべきじゃないのか？」

「いいから休めって。ノアから聞いたぞ。最近仕事を立て込んでたそうじゃな

いか。」

「休みなよ。料理が心配なら、俺が人型になって手伝うから。」

「…別に、料理の心配をしているわけじゃないが。まあいい、じゃあ料理は頼む。」

「零はスマホでも見てなってる。」

「人をダメにするソファ」を買ったらしいじゃん？ せっかく買ったんだし、使ってみなよ。」

「ああ…。」

突然。連絡が来た。

『明日、会えるか。』

「…？」

『いいけど。何かあったか。』

『頼みたいことがある。詳しいことは明日、会った時に。』

『わかった。』

『そちらに行ってもいいか。俺のところだと少し話にくい。』

『そういうことなら。家で待っている。』

翌日の昼下がりに、家を訪れたのは古くからの友人であり、名家の御曹司でもある、穂鷹久遠であった。

いつものように訪れて、この家で唯一の洋間である応接室（もどき）に通してやり、茶を出してやると、目に見えて機嫌がよくなった。

千颯が手土産として持ってきた銘菓シャロンを、幸せそうに頬張る久遠に尋ねた。

「…それで、俺に頼みたいことって？ あまり手間のかかることはしたくないが…」

「ああ。簡単なことだ。」

「…？」

一拍置いて、久遠は言った。

「絵を描いてくれ。」

時間が、止まった。

「…は？」

ぽかんと開いた口からこぼれたのは、そんな間拔けた一言だった。

「っ…はあ!？」

「お、動いた。」

「いやなんだよいきなり!? ってか、嫌に決まってるだろう！ 絵は描かないって、お前は知って—」

「零」

久遠が遮った。

「俺のために、絵を描いてほしい。」

真剣な眼差しで、零の瞳をしつかりと射抜いて。

「俺は…」

「誰かに見せたいとか、飾りたいとかではない。予言してほしいわけでもない。…確かに、そろそろ肖像画を作るべきだ、という声は上がっている。だが、肖像のことなどどうでもいいのだ。ただ、俺が俺の絵を描くことを許せるのはお前しかない、そう思ったのだ。」

「…」

「予言のための絵ではない。誰かに見せびらかしたり、飾り立てたりするための絵でもない。ただ俺のためだけに描かれた絵が欲しいのだ。」

久遠の顔は、微かに歪んでいた。

「それは…」

「俺のためだけに、俺の絵を描いてくれる人間など、お前のほかには知らなかった。お前が、依頼を受けて絵を描くことなどないと、わかつてはいたが、だ…」

「わかった」

「…え？」

「その依頼、引き受けよう」

「…よかったの？ 零。」

「…ノア」

「あんなに、人のために描くことを嫌がってたのに。」

「…俺は、久遠じゃない。久遠の立場になったことがないから、わからない。」

「…」

「でも、あいつが、ひとかけらの嘘偽りなどない心の内を見せたんだ。綺麗に描くことや正確な未来を映すことを求めず、俺があいつを描いた」という事実だけを求めた。」

「…」

「あいつは、幼いころから多くの嘘と偽り、ほんの少しの真心に囲まれて育った。名家の跡取りとして、取り入ろうとする者や利用しようと近づいてくる者たちを避けつつ、振り向かない両親の愛情を求めながら。」

「…両親は仕事や家を盛り立てることに忙しくしていて、子供たちのことは教育係の者に任せきり。跡取りであるが故に、兄弟とも区別されて育てられた。」

「結果として、久遠は真つ直ぐすぎるくらい真つ直ぐに育ったが、それらのことが久遠の中に大なり小なり、歪みを残したことは確かだ。」

「対人関係に特に顕著に表れているよね。その性格というか、立ち居振る舞いから、傲慢な人間だと誤解されることもあるけど、実際は人との関わり方をうまく習得できずに対人能力に難が残ってしまった状態だと言える。」

「考えを偽ることはないが、感情ではない想いを素直に表現することが少ない。そんな久遠が、珍しく素直に言葉にしたんだ。人を頼ることのない久遠の依頼を、叶えてやりたいと思うてもいいだろう。」

「理屈っぽーい…。」

「からかうなよ…。」

「やつほー。元気してるか？…って、あれ？」

「ハルカ…珍しいな、一人なんて。」

「珍しいはこっちのセリフだよ。お前が絵を描いてるなんてさ。」

「…ほかでもない、久遠の頼みだったからな。」

「ふーん…」

「何だよ？」

「いや、いいなって思ってた。」

「何が？」

「俺はさあ、お前が絵を描いてるのが好きだったんだよ。」

「…初耳なんだが。」

「初めて言っただけ。」

「そうだが…」

「俺だけじゃなくて、みんなそうだよ。」

「そうだったのか…？」

「お前は、絵と真剣に向き合ってた描くだろ？ 指先から魔法みたいに色があふれる様子はもちろん、描いてるときの真剣な表情だって、みんな言わないだけで好きなんだよなあ、実は。」

「初めて知った…」

頭を抱えてしまった零を見て、ハルカはけらけら笑った。

「…ありがとう、ハルカ。」

素直に感情を表すことの少ない零の言葉に、ハルカは驚いて目を見張った。

「…受け取っておくよ。どういたしまして。」

ハルカ。零の友人の一人である、狼の妖怪の青年。

動物系妖怪の幼馴染たちといつも一緒に行動していて、一人でいることはめったにない。

妖怪としては強いわけではないが、グループの中でリーダーを務めるだけあって、自由奔放な者が多い零の友人たちの中では面倒見がいいほう。

「俺を呼び出したということは、まさか…？」

零は傍らの天板傾斜型美術机に立てかけられ、布を被せられた「それ」を見遣った。

「依頼の品だ。」

とたんに、久遠の顔がにこーっと、子どものような満面の笑みを湛える。

「ありがとう、零!!」

「確認してくれ。お前の望むようになったか。」

「もちろんだ!」

久遠は嬉々として布をめくった。

その後、喜びすぎてテンションが異常なくらい上がった久遠に、零と一緒に振り回されまくったのは言うまでもない。

ご機嫌な久遠が帰り、夕日が暈の目をくつきりと浮かび上がらせ始めた頃。

俺は一つの問いを投げかけた。

「明日で、約束の三ヶ月だよ。どうするのか、決まった?」

「決めた。…もう、大丈夫だ。」

「そうか。…安心したよ。」

零の表情は夕日の影になっていたけど、俺は読まなかった。

翌日も、晴れていた。

「たんでーさん…」

「よく来たな。まあ、入れ。」

「おじゃまします…」

少年はとぼとぼと零の後をついて歩いた。

ソファアに座っても、零がお茶とお菓子を出してあげても、うつむきがちなまま。

「…元気がないな。なにかあったか。」

少年ははっとして顔を上げた。

「その…やっぱり…」

「?どうかしたか。」

「やっぱり、【予言絵の魔女】は見つからなかったんでしょ?」

「そのことか。…まあな。会えはしなかった。」

「やっぱり…そうだよね。」

少年は泣きそうになりながら零に言った。

「たんでーさん、ごめんなさい。ぼくのわがままで、何ヶ月も…」

「…」

零は顔をしかめてため息をついた。

「そんなんじゃ怖がられちゃうよ。」

「…知ってるか。」

「え?」

「【予言絵の魔女】は世界に五人しかいないと言われている。」

「…?」

「魔女は文字通り、絵によって【予言】を行う。予言の力がなくてはならない。

だから、ただの絵描きでは魔女にはなれない。」

「…」

「一番最初の【予言絵の魔女】は、夜と月の神だったそう。そして残りの者も、彼女に連なる系譜の、予言の力を受け継いだ者たちなんだ。…彼らも古い時代の人だから、もう生きているのかもわからないが。」

「すごい…しらなかった!」

少年は目を輝かせた。

零はそんな少年を眩しそうに見ていた。

「…そう、〈祈願絵〉って、知ってるか。」

「…?知らない。なにそれ?」

「【予言絵】の仲間みたいなものだ。今回調べているうちにたどり着いたんだが、〈誰かの幸福を願って描き、贈る絵のこと〉なんだそうだ。」

「へえ…しらなかった!」

「祈願絵は予言絵と同じく、描く人間はほとんどいない。だが予言絵と違って、特別な力は一切要らない。相手の幸福や幸運を願いながら描けばいい。予言絵と同じか、それ以上に真心を必要とするんだ。」

「…! たんでーさん!!」

「何だ。」

「ありがとう! ぼく、予言絵が描けなくても、祈願絵を描けるようになるよ!!」

零はふっと笑った。

「…そうか。」

少年は、泣きそうになっていたことなどなかったかのような笑顔で帰っていった。

た。

夕焼けの街に消えていく少年を見送り、零は踵を返した。

「さあ、久遠たちが待つてる。」

「そうなのか？」

「一つの仕事が終わった祝いに、パーティーをするんだと。久遠に千颯に、ハルカたちや凜たち…シャルたちまで来るらしい。」

零が歩いていくのを目で追いながら、思わず苦笑が漏れてしまった。

「それは…：たいそう騒がしくなりそうだ。」

ドアに手を掛けたところで、その後ろ姿に言葉を投げる。

「よく最小限の嘘で済ませたね。」

「嘘だなんて人聞きの悪い。俺はただ、明かさなかったただけだ。」

俺が【予言絵の魔女】の一人だったことを。

「ねえ、こんな話知ってる？」

あの出来事からの5年が過ぎ、上界の頂点ともいえる瀟晏は、破竹の勢いで上界の半分以上を破壊し、更地にした直後、音もなく姿を消したのである。あまりの悲惨な残骸に、そのことは名門世家の者たちはもちろん、普段上界とはかわりがないような平凡な村でも、このように、人々の間で長い間にわたり、話題になったのだ。

「どんな話？」

「瀟晏様によって更地にされた、上界の凄惨な現場だよ！」

「それは大げさじゃない？」

女性には友人に疑いの目を向けた。

「それは聞いてから判断してもらいたいところだ」

友人は意味深な笑みを浮かべ、危険な雰囲気を出す。

「それくらいのことであれば、内容を教えちゃえばいいのに。」

女性には挑発するように言った。

「はいはい、急がせるようなまねはよしとしてくれ。もともと教えるつもりでいる。」

友人は不満を漏らすと、そのまま言葉をつづけた。

「まず、あの誰もが知る名門『沈家』の結末だよ。奴らが瀟晏様の『想い人』に触れたせいで、一族全員、生きたまま皮膚をすべて剥ぎ取られたんだ。ただの赤い肉塊に変えられた彼らは、沈家の立派な門前に、まるで干し肉のようにずらりと吊るされた。」

しかもね、それだけじゃ終わらなかった。瀟晏様は術で彼らの意識と身体を操り、門前に吊るされたまま、自分の剣で自分の肉を削ぎ落とさせ続けたんだ。地面には赤黒い血の海と、彼ら自身だった肉片が山のように積み上がり、あたりには息が詰まるほどの鉄錆の臭いが充満していたらしいよ」

「皮膚を剥がすなんて……そんなの、どれだけ残酷なことをすれば気が済むのよ……！」

女性は見開き、胃の底からせり上がる吐き気に襲われた。彼女の想像の限界を遥かに超えた地獄絵図が、まぶたの裏に浮かぶ。

「まだあるよ。」

友人は喉を鳴らし、取り憑かれたような目でさらに語る。

「一番酷かったのはやはり『壊門』だね。瀟晏様は、壊門の人間たちの骨を、肉を切り裂くことなく、生きたまま中身だけを無理やり引き抜いたんだ。骨を失ってぐにやぐにやになった手足をちぎり、まるで足元の虫でも殺すように、容赦なく踏みつぶした。」

骨と肉が潰れて原形を留めなくなった彼らを、瀟晏様は狭い一部屋の中に、家畜の死体のようにまとめて投げ込んだ。生きながらにして自身の肉の塊に埋もれた彼らは、叫ぶことすらできず、ただ暗闇の中で肉の擦れ合う音と、微かな呼吸音だけを響かせていたそうだよ」

女性はずっかり固まってしまった。二人の間でしばらく沈黙が続いた。

「壊門は……一体何をして、そんな結末になったの？」

女性には、今にも震え出しそうな声で辛うじて問いかけた。

「あはは、そんなに怯えることないじゃないよ？ 仕方ないよね、ま、所詮私たちはあの瀟晏という怪物を、ただの人間だと軽く見すぎていたんだ。まさか、あそこまで嫉妬に狂うなんて、一般人の思考じゃ思いもしないから」友人は自嘲気味に笑った。その乾いた笑い声が、女性の胸をナイフのように刺す。

「私は……うまくいくと思ったのよ……！」

女性には突然、溢れ出しそうな感情を堪えるように両肩を激しく震わせた。

「瀟晏にとって、阿徽のことなんてどうでもいいはずだって。私はただ、阿徽に生きてほしかった。ただ幸せに生きてほしくて……だから、懷哉が阿徽に告白をするようにって、裏であれこれ話し合って、手回しをしていたのに……！ まさか、あの瀟晏が、阿徽にそこまで執着して邪な思いを抱いていたなんて……っ！」

そういうながら、女性には阿徽が、懷哉と楽しそうに過ごす光景を思い出す。

「……それは、私の責任でもある」

友人は、崩れそうな女性を慰めるように静かに声を掛けた。

「もし私が、もっと早くあいつの行動を予測して、懷哉を救い出すことができていたら……」

そうしていれば、沈微が絶望のあまり自分を責めて、自ら命を絶つことなどなかったはずだ。

沈微は、その生涯を通してあまりにも責任感が強すぎた。

彼が死ななければ、瀟晏が狂い狂って、あのような地獄の悲劇を引き起こすこともなかったはずなのに。

——いや。そもそも瀟晏は人間ではないのだから、どうであれ、このような結末にたどり着くのかな。

女性はや葉を探し、何とか自分を正当化しようと言い訳を試みる。しかし、どれほど思考を巡らせても言葉は見つからず、ただ底知れない罪悪感が心を麻痺させていく。じわじわと、重く苦しい後悔だけが胸に沈殿していった。

「あの二人の過去を……もう一回、話してくれる？」

女性はある、祈るようにぼつり、と呟いた。

「え……？」

友人は呆氣にとられ、動かしていた手の動きを完全に止めた。

「……………うん、わかった」

長い、長い沈黙が流れた。

「……………うん。」

しばらくして、彼女は喉の奥からようやく一言を絞り出した。

静かに、そして大きく息を吸い込むと、彼女はあの『始まりの日』の記憶を語り出す——。

今から、もうずっと昔のこと。あるところに、名前すら持たない貧しい少年がいた。

彼は生まれた瞬間から孤独だった。

親の温もりを知る前に、生きるために野良犬の群れと生ゴミを奪い合わなければならなかった。

飢えた狂犬のほえる声が耳に響くと同時に、その牙が少年の細い手首を深く引き裂き、傷口から溢れた膿と泥が混ざり合ってカピカピに固まり、犬の唾

液に含まれる雑菌のせいで、夜になれば脳が焼き切れるような高熱にうなされ、凍てつく地面の上でただ脳裏を麻痺するような痛みに耐えるしかないのはもはや日常であった。

たまに、彼が力尽きて死体のようにはいつくばっているのを見て、通りすがりの人々が憐れみから数枚の硬貨を投げ捨てていくことがあった。だが、それと同じくらいの頻度で、退屈した大人や酔っ払いたちから、道端に転がる価値のない石ころを踏みつけるように、ただの憂さ晴らしの暴力として蹴り飛ばされた。

「畜生が、お前の分際でいい顔をしゃがって。」

「一ミリの価値もない、社会のごみくずが。」

硬い泥靴が肋骨を折る鈍い音と罵倒が響き、少年は顔をかみしめた。

「ごめんなさい。。ごめんなさい。。許してください。。」

そうつぶやき、肩がふるえ、耐えるしかなかった。

泣いてはいけない。泣くともっと殴られるから。

彼の日常には、常に神経を壊すような狂った血の匂いと永遠に続く拷問のような絶望が交互に行き渡り、内臓を雑巾のように絞られるような空腹が友達のようにすら感じていたかようになっていて、目に映る背景はいつでも薄汚い裏の小さな路上と、そこにあるかすかな、光が消えそうな、錆びた灯台だった。

湯気を立てる白ご飯の味など想像すらできず、ましてや、誰かの手が自分に向けられ、優しく抱きしめられるような『ぬくもり』という概念の存在など、微塵も、一瞬たりとも脳に浮かんだことはなかった。

少年が五歳になると、生き地獄はさらに過酷さを増した。自分と同じように飢え狂った孤児の子供たちと、一切れの埃のついた汚く、硬いパンを巡って殺し合いのような奪い合いを繰り返した。体格の劣る彼は、毎回、顔の骨がきしむまで殴打され、両目の視界が血と腫れ物で塞がり、自分の元の顔の原型が分からなくなるまで凄惨に痛めつけられた。

「アハハ！ ざま見ろ。これでわかればいいのだ！」

そういつて、子供たちは足で少年のけがの上に踏みつけ、しばらく罵った後で、笑い声をあげながら立ち去っていた。

その日はドブの臭いがする川の濁り水をすすただけで胃袋を誤魔化し、腹の虫が悲鳴のような音を立てて鳴り響くのを無視して、骨まで凍る冬の夜風に耐えながら横になった。衣服とも呼べないボロ布の隙間から、雪の冷たさがじわじわと皮膚にしみこみ、体温と思考を奪っていた。

そんな夜が何百回、何千回と、数えられないくらい繰り返されると、彼の精神は麻薬を飲まされるような、麻酔を打たれたような感覚に変わった。

（ああ、自分の人生はこのまま、誰にも気づかれずに、この寒さと空腹の中でゴミのように死んでいくのだな）

死ぬまでに、まともな食事を一度でも口にすることは叶わないのだろう。そう願うだけで罪なのかもしれない。

かつて見た他の孤児の死体のように、自分の死体もハゲ山に投げ捨てられ、冷たくなった眼球や内臓を鴉についばまれて、彼らのエサとして消えていくのだ。

それとも、内臓を取り出されて、どこかに売り飛ばされるだろうか。前に見かけたあいつみたいに。

ごみの隙間から見える、知り合いが真っ黒な服を着ている人たちによって内臓を取り出される光景を思い出した。

記憶から、あの憎悪に満ちた叫び声が離れられない。

そして、あの人たちの興奮したような笑い声も。

「これで私の子が助かるわ！」

「ありがたく思え、お前は生きてても社会の荷物になるだけだ。この俺が解放してさらなる価値に変えてやったのだぞ。感謝しろ。」

男の見下すような声が、湿っていた、血の生臭いにおいが広がった暗い部屋中に響く。そして、下劣の笑い声とともにぐちゃと何かが踏まれた音がしばらく続いた。

その時、少年は肩を震わせ、嗚咽しないように口を必死に抑え、体を縮め、見つけられないようにと必死で、疲れ果てて気絶するまで願ひ続けていた。少年の心の中にある悲しい未来は、年を重ねるごとに、確定事項として脳の奥底に完璧に植え付けられていた。

この先の道が濃い霧によって日に日に見えなくなかった。

——運命という名の巨大なシステムが、今までの生活をすべてひっくり返る、あの雪の日までは。」

少年の十二歳の誕生日。それは、身震いするほどに冷え切った、暗い冬のあの日のことだった。

その日も彼はいつものように、生きるために他の孤児たちと泥臭い食べ物の奪い合いをした。けれど、今日ばかりは珍しく運が味方し、ほんの少しの食べ物を得ることができたのだ。

少年は奪い取ったばかりの小ぶりのまんじゅうを口に放り込み、そこから広がる微かな温かさを、噛みしめるように味わいながら街を歩いた。

年の瀬を迎えた町は、眩いほどのにぎやかさに包まれている。人々は上質な、見るからに暖かそうな上着を身にまとい、幸せそうに街を行き交っていた。

溢れ返る人混みの中、子供たちは両親の手を左右からしっかりと繋ぎ、宝物のように大切にそうにお菓子を抱えている。

「ママ、ぼく、お菓子をもうと食べたいな。神様にお祈りしたいの」

「まあ、何をお願いするの？」

「神様にね、ぼくがもつとパパとママに愛されるようにってお願いするんだ」小さな子供は、それはそれは真剣な顔で母親を見上げて話した。

「晏嬰ったら。私たちはいつだって、あなたのことを心から愛しているのよ」母親は愛おしそうに笑みをこぼしながら、我が子を優しく抱き寄せ、そう教え諭した。

——「愛」。それはあまりにも遠く、届くはずもない未知なもの。しかも少年は妄想を止められずにいた。

——神様がもし、本当に一つだけお願いを叶えてくれるとしたら。もし、本当に、こんな底辺にすがりつく俺の願いを届けてくれるのなら。

「普通の生活というものを、知りたい」

少年は、ふと心の中に浮かんだ取り留めのない思いを、そのままぼつりと口に出していた。

冷え切ったご飯ではなく、温かいご飯をおいしく食べてみたい。冷たく湿っ

た地面ではなく、柔らかな布団の中で眠ってみたい。毎日奴隷販売者におびえて、眠られないのではなく。

もし、もっと、神様が呆れるほどの贅沢な願いをしてもいいのであれば……。

少年は歩みを止め、きらきらと輝く店の窓越しに見える、楽しそうな家族の団欒にそっと目を向けた。

ぬくもりというものを、知りたい。

「……なんてね」

少年は自嘲気味に呟き、白く濁ったため息とともに、その切ない願いを冬の夜空へと溶かした。

そんなの叶うはずもないと、彼は理解しているから。

少年は町のあちこちに足を運びながら、自身の孤独な世界に没頭していた。今日もまた、何事もなく泥のように過ごすのだ――。

そう思いながら宛てもなく歩いていたら、突然、世界がひっくり返るような衝撃に襲われた。何かに、強くぶつかったのだ。

「すみません」

突如として訪れた現実には、彼はぎこちなく顔を上げた。そして、自分がぶつかった相手を凝視したまま、息を呑んだ。

そこにいたのは、気難しそうで、まるでこの俗世から完全に切り離されたかのような雰囲気をもつ少年だった。

その子供は真っ白なマフラーを巻き、腰まで届く黒曜石のように長い髪を少し乱れている。雪のように白い肌は、厳しい寒さのせいで愛らしく桃色に染まり、鼻奥をツンと刺すような、清らかな針葉樹林の木の香りが漂ってきた。

子供はしばらくの間、凍てつくような冷たい目で少年をにらみつけた。

「なんだ？」

少年ははっと我に返り、怯えたようにぺこぺこ頭を下げた。謝罪の言葉を口にしようとしたが、まともな言葉を知らないため、喉が詰まったように何も言えなかった。

「お前は、親がないのか？」

「……」

「喋れないのか？」

「……」

「おい、聞こえてんの？」

少年はどうしていいかわからず、ただ小さく頷くことしかできなかった。

子供はそんな少年を値踏みするように見つめ、少し不満そうに眉をひそめた。

「おい、ちょっとこっちに顔を向ける」

「？」

少年が呆然としてみると、子供は躊躇いなく少年の顎を掴み、強引に自分のほうへと向かせた。翡翠色の瞳に、驚愕に目を見開いた少年のマヌケな表情が映り込んでいる。

「お前、私の部下にならんか？」

子供はしばらくして、その唇に妖しい笑みを浮かべて提案した。

「は？」

少年が完全に石のように固まったままだけると、子供は「まだ理解していないな」と察したように、淡々と説明を続けた。

「私の部下になったらどうだ？ 見たところ、お前には家族がおらず、犬とやらと食べ物を奪い合って生きてきたのだろう。さつきから私が喋るたびに固まっているということは、さては言葉を教わっていないのだな」

子供は少年の顔を巧みに読み取りながら、さらに言葉を重ねる。

「だが、私の部下になれば言葉を学べるだけでなく、温かい食べ物も、凍えない寝床も手に入る。それどころか、いずれ私が当主になった暁には、私の側にいるだけでお前の価値も勝手に跳ね上がるのだ。その上で私も愚かではなく、バカなふるまいで破滅することもない。どうだ？ 悪くない話だろ？」

「……ん」

あまりの圧倒的な存在感到、少年はついに、小さく首を縦に振った。

「よし。では、まず名前を教えろ」

「……」

「――ってそうか。お前は孤児だから、そんなものあるはずないよな」

子供は小さな拳を顎に当て、考える素振りを見せた。

「仕方ない。この私がつけてやろう。お前の名前は、今から『瀟々』だ」

そして、そのまま雪のような白く小さな手を差し出し、こちらを招くように手のひらを上へ向けた。

少年は一連の出来事に頭の理解が追いつかず、すっかりされるがままになっていた。彼はただぼんやりと、目の前にある小さな手を、夢でも見るように見つめることしかできない。

「私は沈微。今この瞬間から、お前の一生の上司だ」

周囲の喧騒が、まるで深い水底に沈んだかのように静まり返る。

やけに大きく響いたその言葉の主は、少年の赤琥珀色の瞳に、この世の何物にも染まらない、今にも消えてしまいそうなほど真つ白な姿は目を開けられそうにないほどまぶしかった。

「よろしくな！」

沈微は、満面の笑みを浮かべて言った。

息を呑むほど美しいその笑顔が、少年の脳裏を、世界のすべてを、鮮烈に焼き尽くしていく。

その黒く長いまつ毛の後ろで、翡翠色の瞳は万年の水が解けたかのような輝きと温かさを帯び、寒さに震える雪肌がぼつと桃色に染まる。それまで冷たく結ばれていた薄い唇が、ふわりと柔らかく、綺麗な弧を描いた。

——きれいだ。

少年は、そつと心の中で呟いた。

「ん」

少年は、自分の止まっていた運命の歯車が、ゆつくりと動き出す音を聞いたような気がした。

魔法のキッチンカー

黒澤優花

「ねえお兄ちゃん、魔法のキッチンカーのお話読んで！」

そう呼びかける僕の二歳下の妹は幼稚園の年長さん。僕にとって一番かわいい妹。明るくてキラキラしてて最近はずが読める僕に本を読んでほしいとよくねだってくる。それをお母さんとお父さんがニコニコしながら隠れてカメラを構えていることを知っている。どうして隠れてとるんだらう僕の妹はカメラに映るの大好きなのに、そういうことを考えていると未来が

「はやく読んで！」

と、言ってきた。僕は子供二人が座るには大きいソファアに座って妹が隣に来るように言う。魔法のキッチンカーのお話は妹の一番のお気に入り、治らない病気になった妹にお兄さんがどんな願いも叶う食べ物売っているキッチンカーをいろんな困難を切り抜けて探しに行くというお話だ。最後は、はぐらかされていて妹が助かったか、そもそもお兄さんが無事に妹のもとへたどり着いたのかもわからない。だけど僕は妹がその真実にたどり着かないように妹が字を読めないのを利用して、最後は食べ物をお口にした妹が奇跡的に助かってハッピーエンドを迎えるように物語を勝手に変えた。そのせいもあってか妹の一番好きな物語となっている。気が付くと最後に差し掛かっている、ここからは内容を変えなければならないので僕は細心の注意を払わなければならない。いつも少し内容が変わっているのはご愛敬。とうとう読み終えて僕は少し眠くなった、妹も目がトロンとしてきている。そんな僕たちにお母さんが毛布を掛けてくれた。

次の日僕は学校に行った。妹も幼稚園に行った。こんなことが起きるなんてこの時は思いもしなかった。僕は学校から帰ってきて呆然とした。泣いているお母さんと目のあるところが包帯で覆われた妹。僕は胸騒ぎがした。妹に何かあったんだ。僕の心音がどんどん大きくなる。耳が音を受け付けない。僕に気づいたお母さんが僕に向かって

「事故にあったの、もう目が見えなくなるかもって。」

そういった。さっきから目が霞む、体中から汗が噴き出る。僕の妹が、困っ

ている子がいたらすぐ助けに行くような子が何をしたらんだ、僕はランドセルを置いてふらふらといえを出て行った。もしかしたら魔法のキッチンカーに行けば妹の目が見える余蘊になるかもしれない、そんな淡い期待を抱いて。それから僕は町中を走り回った、閑古鳥が鳴くデパート、妹が通っているもうすぐ閉園になる幼稚園、僕が通っている小さな小学校、人の声が飛び交う商店街、建物が立ち並ぶ街の中心街、そこまで来て僕の体力は限界を迎えた。もう少し見て回りたいけど足が言うことを聞いてくれない。仕方なく僕は近くにある公園のベンチに座ることにした。座った瞬間疲れがどっと出た。疲れていると人はネガティブになる、メロスだってそうだった、よくよく考えてみれば魔法のキッチンカーなんて存在するかもわからない。もう空もオレンジ色になっている、僕はもう十分に探したもう諦めていいんじゃないか、魔法のキッチンカーを見つけてあげられない罪悪感からか言い訳がどんどん浮かび上がってくる。そんなことを考えているとふと、人懐っこそうに笑う妹の顔が思い浮かんだ。妹を助けたい！僕は決心した、ほんの少しでも希望があるのなら僕は妹のためになんだってする。僕の疲れは一時的だし、今一番悲しいのは僕でもなくお母さんでもなく妹なんだから。立ち上がる甘い香りが鼻をくすぐった。この香りはもしかしたら魔法のキッチンカーかもしれない一縷の望みをかけて僕は甘い香りがする方へ無我夢中で走る頭の中は何も考えていない体力もないただ、大好きな妹を助けたいという兄の本能で走っていた。すると急に開けた場所にきたそこは幻想的で現実ではありえないほど美しかった、辺りには赤いバラや椿などが咲き誇り花一輪一輪がお互いの良さを引き出しあっているその花園とも呼べる場所には一台の澄んだ夏空色のキッチンカーがあった。僕は意を決してキッチンカーに近づくと若い女性の姿が見えてきた。

「魔法のキッチンカーですか。」

単刀直人に僕はそう尋ねた。

「はい、そうですよ。」

若い女性の店員さんがこっと微笑みながら言った。お姉さんは艶やかな黒髪、まつ毛の長い垂れ目の瞳は黒曜石のように黒く、純粹無垢の子どものように輝いている。もうこの人にかけるしかない！

「じゃあ僕の妹を助けられますか!」

僕は祈りながら返答を待つ。

「できますよ。条件がありますが。」

僕は息を呑んだ。どんな条件が出されるのだろうか、でもここまで来て引き返すわけにはいかない。

「なんでもします!だから、妹を助けてください!」

僕の声は自分でも信じられないほど震えていた。

「じゃあ、妹さんが好きな果物と楽しかった思い出でも聞かせてください。」その言葉を聞いた瞬間僕は拍子抜けした。腕一本ぐらい取られると思っていたのに。

「妹が好きな果物はいちごですけどそれだけでいいんですか?」

思わず僕は聞いてしまった。

「それだけなんて言わないでください。人を救う魔法を使うには相手を思う気持ちが必要なんです。」

そういうと微笑みながらお姉さんは僕に言った。

「この花、変に思いませんか?」

僕は首を傾げた。なんだろうさつぱりわからない。悩んでいるとお姉さんがキッチンカーから降りてきて花を愛でながらお姉さんは答えた。

「ここでは春夏秋冬関係なくいろいろな植物が咲きます。この秘密知りたいですか?」

今度はいたずらっぽく笑っている。よく笑う人だ。

「秘密知りたいです。」

やつぱり気になってしまう。

「わかりました。」

彼女が意を決したように続ける。

「ここはよくも悪くもナニカを願う人が来る場所です。ここは魔法がかかっていてその人の心が反映されます。いい人が来るときれいな花が咲き誇り、悪い人が来ると花が枯れます。私はいろいろな人のために魔法を使ってきました。悪いことに使われることを知っていないながら。」

一拍おいてお姉さんはつぶやく。

「私は君のような人のために使いたいと思っています。だから君の妹さんは絶対に助けます。」

そういつてお姉さんはクレープを作る。出来上がったクレープはキラキラ輝いていた。

「これを妹さんに食べさせてあげてください。」

そういつたお姉さんは少し寂しそうな顔をしていた。

「本当にお礼はいいんですか?」

お姉さんは少し考えて。

「なら、たまにきてお話を聞かせてください。」

その声を聞いた瞬間視界が白く染まる。視界が元に戻ると僕は家の玄関にいた。靴を脱ぎ捨て妹がいるリビングにいくお母さんは電話をしているようにリビングには妹と僕しかいない。

「これ食べて。」

そういう僕は妹にクレープを食べさせる。すると妹が一口食べた瞬間。

「目が見える。見えるよ。お兄ちゃん。」

妹が驚いたようにそう言った。僕はその言葉を聞いた瞬間力が抜けて僕は倒れこむ。よかった。安心したからか眠気が急に僕を襲い僕は眠ってしまった。

「お兄ちゃん。」

呼び掛けても反応がない、寝ているみたいだった。死んじゃったのかと思つてびっくりした。お兄ちゃんを頑張つてソファに運んで私もソファに座る暇だからあの本も持ってきた。私はこの本の内容が好きというわけではない、お兄ちゃんのやさしさがわかるから好きなのだ。私はお兄ちゃんがこの本の最後を変えて読んでいるのを知っている。毎回微妙に内容が変わっているから。でも私はそのことについて何も言わないそれがお兄ちゃんなのやさしさだから。

「お兄ちゃんいつもありがとう。」

友人

幻想翡翠

あれは、高校一年生のとびきり暑い夏のことだった。雲一つない青空に、すくすくと伸びる向日葵が元気に咲いていていかにも夏らしい。私は学校に置いていたまだちょっと見慣れない教科書を全部カバンの中に押し込んで、一人アスファルトで舗装された道路を歩いていた。肩に全教科分の重さが乗って息が苦しくなる。こちらの苦勞も知らないように照り付ける太陽がやけに忌々しい。けれど、どうにか歯を食いしばって、一步一步を踏ん張って、家まで帰った。何故なら、明日から夏休みだからだ。今日は終業式だった。予定だともっと早く帰れるはずだったのに、勝手に決められていた美化委員の仕事である教室のワックスがけをやっていたせいで、他の子よりも30分位遅くに下校した。

おかげで、家に帰るころにはもう正午を過ぎていた。もうすでに弟は家にいるはずだ。

家に一人でいる弟を想像すると、帰りが遅くなってしまったことに対する罪悪感がふつふつと湧き出して、アパートの階段を昇る足が速くなった。今日は午前中に帰れると伝えていたのに、その約束を破ってしまった。もうお昼は食べたのかな。いや、きつと食べていないな。今日は何を作ろうかな。冷蔵庫と相談しないと。遅くなつてごめんね。寂しかったよね。今日はもうどこにも行かないから。

私は通路の一番奥のドアに鍵を差し込んで勢いよく開けた。

「ただいまー!」

おかしい。いつもならすぐに返事があるはずなのに、今日は聞こえてこない。変だな...と思いながら玄関に入ると、洗面所から微かに甘ったるい臭いがした。

「……っ」

嫌な予感がした。背中に滲んだ汗が一気に冷えたような気さえしてくる。

私は抱えていた荷物を全部その場に落として、洗面所に駆け込んだ。甘い臭いはどんどん濃くなっていく。

洗面所の奥にある風呂場の扉を、先ほどよりも力強くこじ開けた。

「ユウ!」

「……」

弟は、ユニットバスの海の中で、一人、事切れていた。

私の父は俗に言う転勤族というやつで、転勤を何度も繰り返していた。当然その家族も付き合わなければならないから、父が転勤するたびに私と弟は転校してきた。おかげで私達姉弟には友達がいなかった。友達ができそうになっても、仮にできたとしても、親密になる前に転校が決まってしまう結局疎遠になる。これを何度も繰り返していた。母は初めのころは専業主婦として家の家事に勤しんでいたが、度重なる引っ越しを経て家計が苦しくなってしまう、去年の秋ごろからパート勤務に追われることになった。帰ってくる時間もその日ごとに異なり、一番遅い日なんかは、朝日と共に帰って来ることもあった。

両親が共働きの状態になってしまったため、料理や洗濯などといった基本的な家事と弟の面倒を見るのを私がすることになった。当然のことながら、勉強との両立は大変なもので、慣れるのに随分と時間がかかった。でも、何も苦しかったわけじゃない。楽しいこともいっぱいあった。それもこれも全部弟が側にいてくれたからだと思う。

私の弟は、私よりも二つ年下の十四歳の中学二年生だ。名前を【ユウ】といった。

優しくて、他者を慮れる素直な子だった。人見知りが激しいところと、身

体があまり強くないことがタマにキズな、どこにでもいるごく普通な男の子だった。

いつも「姉ちゃん、手伝うよ!」と声を掛けてくれた。私のメンタルが弱ってしまつて、部屋のすみっこで泣いていた時も、「大丈夫だよ姉ちゃん。僕がいるよ!」と言って私の涙が止まるまで背中をさすってくれた。私の誇りで、大切な弟だった。この子が側にいてくれれば、何も怖くないと本気でそう思っていた。

だが、弟は死んだ。しかも自殺だ。心当たりはあった。弟は最近、学校でのいじめが元で心を病んでしまい、不登校状態になっていたからだ。どうして気づけなかった? いつ見落とした?

私は、一番長くあの子の側にいたのに。

父の転勤による引越しの場所を選ばれたのは、都心から遠く離れた田舎だった。この場所だけまだ時代がひと昔前といった感じで、周囲の空気がやけに濁っているように見えた。

田舎、というのは当たり前だけれども都会と離れているのだから田舎なのであって、都会にはない習慣や文化がごろごろと転がっている。私達家族が越してきた田舎は、そういった古くからの習慣を大切にしているタイプの田舎だった。その地独自の習慣になれるには、どうしても時間が掛かる。前に住んでいた場所と大きく違うなら尚更。そして、村人達はそういった習慣を大事にしないやつを酷く忌み嫌った。

結果として、私達家族は村の住人に嫌われてしまった。まるで腫れ物のような扱いを受けたのだ。

学校の数も少なく、そこに籍を置いている生徒たちも昔ながらの仲で既に幾つかの仲良しグループができていた。最初は良かった。歓迎ムーブがあった。仲良くなれそうな気配をみんな纏っていた。けれど、それは化けの皮だった。

日にちが経つにつれて、周りは本性を現しはじめた。私と弟は徐々にクラ

スで孤立し始めた。上履きが盗まれたり、机に落書きがされていたのはほんの序の口に過ぎない。

弟は、奴らにとつては格好の的だった。いじめ行為はさらに過激になった。止める人は誰もいなかった。学校の先生の大多数はこの村の人間だったからだ。

両親には学校でイジメられているとは口が裂けても言えなかった。両親も村からイジメられているようなものだったからだ。

とある日、珍しく弟のほうが遅く帰ってきた。普段は私のほうが遅く、弟のほうが遅く帰ってくるなど減多にない。だから、私はやけに胸がざわついた。嫌な予感がした。

弟は、全身ボロボロになって帰ってきた。

どうしたの、聞いても弟は答えなかった。ただ下を向いてガクガクと震えるばかりで、鼻を吸る音がした。私は傷だらけの弟をただ抱きしめることしかできなかった。

この日は二人同じベッドで、互いの体温を分かちあいながら寝た。

その日を境に、弟は学校に行かなくなった。

食事をあまりとらなくなった。

何かに怯えているようで、一日中泣いている日もあった。

逆に一日中起きている日もあった。

けれど私と目が合うと、弟はいつも笑っていた。きつと無理をして笑っていたに違いない。

どうして気づけなかった。私もイジメられていたから? いや違う。そんなのはただの言い訳だ。私なんて姉失格だ。姉なんて肩書きすらおこがましい。私も一緒だ。アイツらと、弟を殴ったやつら。それを止めなかった周囲の大人たち。

私が弟を殺したんだ。

「うわあああああああああ!」

弟が死んでから暫く経った。簡単な葬儀をして、ユウは思い出になつてしまった。これを期に私の身の回りは一氣に変わつていった。まず初めに、私はあの魔境から脱出した。これに関しては、魔境側が喜んでいたのである意味 Win・Win だろう。父はついに我慢の限界が来たのか今の仕事を辞め、新たな職についた。悲しいことに転勤族からの脱却は出来なかつたけれど、前よりも格段に引越す回数が減った。こう見るといかに父の以前の職場が異常だったかが分かる。母は仕事を辞めることはなかつたが、以前と比べると大幅に家にいる時間が増えた。

私はというと、どんな精神を病んでいった。私の心は、ぼつかり穴が空いてしまつたかのように、何も感じなくなつた。「ユウを失つた」という喪失感が大きすぎて、久しぶりに受けた両親の愛も、周囲の人々の温かさも、何もかもが私の心を風のように通り過ぎた。一瞬、あの子の元に逝こうともした。だけど、【死んで楽になるのか。向こうであの子に会えるわけでもないくせに】と内なる自分が囁いて、死ぬことはできなかった。こんな自分が嫌で、海の泡となつて溶けて消えてしまいたいと何度思つたことか。

失意の日々をぼんやりと過ごす中、私の目にある広告が飛び込んできた。『心にギャルを飼おう!』

その広告は自己啓発本の一種で心の中にギャル——所謂ポジティブマインドを身に着け、幸せな人生を過ごそうといったものだった。

ギャル。明るくてキラキラしている女の子。私も心にギャルを飼えたのなら、こんな毎日少しは良くなるだろう。

気付けば私の手はその本に伸びていて、親に内緒で買つてしまつていた。本の内容はあくまでもギャルのようなポジティブシンキングを育てる方法が書かれているに過ぎず、見た目や言動をギャルに寄せる術は載つていなかった。私は全く別の人間になつたかった。だから、身も心もギャルになろうとした。

手始めに、黒かった髪を茶色く染めた。それから、メイクに手を出した。雑誌やネット上のサイト、動画などを見て必死にギャル風のメイクを覚えた。私服も変えた。肌を焼いて、流行を覚えて、爪を長くした。登校用の鞆に付けるチャームやネックレス、ブレスレットといったアクセサリーも買った。自分ができることを何でもやった。

見た目を変え始めてから、数ヶ月後。鏡にはそれまでの私とは違う別人が写つていた。我ながら、中々の出来だと思ふ。

「(あとは、心を変えるだけ:~)」

その後は心の中にギャルを宿し、嫌なことがあつてもあまり気にしないように心がけた。「気にしない・気にならない・気にもとめない」ことを念頭に置いて、周囲に明るくテンションが高いキャラを演じた口調も当然変えた。家でもその態度を変えないようにした。両親はすぐに私の性格の変化を見抜いた。でも止めはしなかつた。きつと私を氣遣つてくれたのだと思う。別人のようになった娘を二人は受け入れてくれた。

学年が一つ進級するころにはほぼ完璧になり切ることができた。

こうして「私」は、「ウチ」になった。

ウチ、夢野アスカ! 今をときめく17歳! 親の転勤で転校した学校がまさかの宗教系だった件! 何回も転校してきてるけどさすがに私立は初だわwwそれもさあ、結構デカイ学校なのよね。ココ。部活もいっぱいあるし、巷では有名なところっぽい! 有名ってだけでテンション上がってきたんですけど〜! マジ楽しみ!

「初めまして! 夢野アスカですっ! これからよろしくお願いしますっ!」
自己紹介、完璧かもしれん。やつぱファーストインプレッションって大事よな〜。

朝のホームルームが終わると瞬く間にクラスの子が飛んできた。けど、男女問わず一斉にくるのはやめてほしいかも〜。ありがたいんだけどね? パ

「ソナルスペース近すぎwまあLINEは交換したけど。これも自分を守る術
ってことで。」

ウチのクラスには比較的明るい子だらけでそこは助かるんだけど、一人だ
け、クラスから浮いているような子がいた。

重たそうな前髪に、三つ編みにした髪を2つおろしたメガネ姿の女の子。そ
の子だけ机に俯いていて、こっちのことは見向きもしなかった。

「(似ている…あの時の私と)」

ちよっと気になったので、先程LINEを交換した子に聞いてみた。

「ねえ、あの子は…」

「なに!?…ああ、綾瀬さん? あの子にはあんまり近づかないほうがいい
よ。何考えてるかわかんないし」

「そーなん?」

「そうそう! それにあの子の両親、うちの学校の教頭と先生やってんの!
しかもどっちも厳しくてさーマジウザいっていうか」

「正直、仲良くするメリットないと思うよ。アスカちゃんには特に!」

「…あはは、そうかな?」

「そうだよ! ね、綾瀬さんなんかほつといて私と遊ぼ!」

「あ、うん、そだね!」

この日は結局綾瀬さんと話すことはなかった。けど、クラスの女子と遊ん
でいるときも、私は綾瀬さんのことが忘れられなかった。綾瀬さんのあの姿。
あの表情。全部、見覚えがあった。

…多分、彼女に近づいたのは、彼女がかわいそうに見えたからだけじゃな
い。きっと私は私の手で救いたかったんだ。

彼女を通して、過去の自分を。

本当はもっと早くにあの子と話したかった。けどパソスペが近い奴らが多
すぎて、ちゃんと話せたのは一週間後だった。マジ最悪。

「ウチら友達にならん!?!」

ヤバイ。自分でもびつくりするぐらいの大声で言っちゃった。これは怖がら
れるやつ。なにしてんだ、ウチ!

綾瀬さんともいスメレっちは、メガネがずり落ちるくらいに目を丸くさせ
てぼかんとしている。

ほら! びつくりしてんじやんかもう! バカ! ウチのバカ!

と、表情を崩さずグルグルと脳内会議をしていると、ややあってスメレっ
ちが言った。

「わ、私なんかでよければ…」

返事はまさかのOK! え、こんなことあるんだ!

「やったー! じゃ、あしたからよろしくスメレっち!」

「ス、スメレっち?」

「うん! 下の名前がスメレだからスメレっち! ウチなりの愛称ってこと
で! あ、もしかしてやだった?」

「い、いえ…親以外の人に下の名前で呼ばれるのが久しぶりで…なんだか、
こそばゆいというか…」

「へへっ、いいじゃんスメレっち。このまま慣れてこ?」

「は、はい…」

この日の会話はこれで終了。次の日から本格的にウチとスメレっちは仲良く
なった。

一緒に移動教室に行ったり、お昼をシェアしてみたり、授業の愚痴をこぼ
してみたり。全部が全部最高に楽しかった。転校初日に仲良しだった子は、
私にすり寄ってこなくなかった。一人だけじゃない。ほとんどの子がそうだっ
た。でも全然気にならなかった。むしろスカッとしたものである。あまりにも
スメレっちとの日々が楽しいもんだから、ウチは家に帰ると真っ先にスメレ
っちのことを話した。今ではもう、ウチがスメレっちのことを話さないとい
向こうから「スメレちゃんと何かあったのか」と聞いてくるくらいだ。
スメレっちとはいろんな場所にいった。クレープ屋、カラオケ、ゲーセン…。
特にゲーセンには放課後毎日行った。もちろんブリも撮った。

結構盛れてるのができて二人で笑いあったこともあった。スマレっちの笑顔がとんでもなくかわい過ぎるのが悪いと思う。二人でとったプリは宝物になった。

スマレっちといると、心の中のぐちゃぐちゃがひとつひとつほどかれていくような感覚があった。スマレっちともっと一緒にいたい。ウチは心からそう思った。

しかし、スマレっちとの日々は長く続かなかった。

最近の真夏日が嘘のように、雨が激しく降っていたある日。
父親から、とんでもない一言が飛んできた。

「すまないアスカ…また、転勤が決まった…」

「…え？」

「…秋頃にはもう異動になる。お前の転校も決まった」

「そ、そんな…どうして、今になって…」

「だから、もう、スマレちゃんとは…」

「い、いつ？ 会えないなら、最後の日に会えるように明日スマレっちに言わないと…！」

「ダメだ！」

「っ！」

父がかつてないくらい大きな声で叫んだ。

思わず身体が強張る。怒っているかのように見えた父だったが、その身体はぶるぶると震えていた。

「…すまない。怖がらせたかったわけじゃないんだ…だが、言うてはだめだ。それに、会ってもいけない」

「どうして！？ いくらなんでもそれは…」

「…これも、お前のためなんだ、頼む…分かってくれ…」

私を諷めるように言った父の腕は、先程よりも震えだっていた。

明らかに、見えない何かに怖がっていた。私はこの時、父が何に怯えているのかを、なんとなく察してしまった。

「…わかったよ…」

納得はいかなかったがしょうがない。ただでさえ困らせてきたのだから、両親をこれ以上困らせるわけにはいかないのだ。

「スマレっち…」

その日の夜、寝る前になって思い出したのは、彼女の微笑む顔だった。

翌日から、私は学校に行かなくなった。いや、行けなくなったほうが正しい気がする。行こうとすると母に引き止められ、理由を聞くと「父の転勤によって変更する書類がいつばいあるから」と言われた。

そんな理由で学校を休んでいいのかと聞くと「理由はなんだっていいの」と消え入るような声で母は答えた。

そんな嘘みたいな理由で両親は数週間私を学校に行かせなかった。その期間中は学校で何が起こっているかすらも分からなかった。私は親に隠れてこっそりとスマレさんに連絡しようとしたが、彼女の電話番号にかけてみても「この電話番号は現在使われておりません」と無機質な機械音しか流れなかった。

時が流れて、長いように感じた夏が終わった。明日の早朝には私はこの街を出ていく。スマレさんと過ごしたあの日々は、随分と遠くに行ってしまった。私はなんだか一人になりたくて、自室に籠っていた。

スマレさん。今頃どうしてるんだろうか。元気にしているのかな。

…心の底から、笑ってるんだろうか。

「…最後に、会いたかったな」

茜色に染まる空を眺めながら呟いた。

その直後だった。スマホが急に鳴りはじめたのだ。見ると非通知設定で、誰かから電話がかかっていた。

始めはイタズラ電話か迷惑電話かと思って無視を決め込んだ。けれど電話が切れることはなく、スマホのバイブレーション音だけが一層激しくなるだけだった。

「ああ、もう！」

痺れを切らした私は、何を思ったかスマホの通話ボタンを押していた。

「…はい、夢野ですが」

「…も、もしもし！ 夢野さんですか！？」

電話をかけてきた相手は、興奮しているのか声が上ずっていてよく聞き取れなかった。

「はあ…うちは確かに夢野ですけど…あの、アナタは？」

「私です！ スミレ！ 綾瀬スミレです！」

「…！スミレっち！？」

「ハイ！ アスカさん！」

なんと、電話の相手はスミレっちだった。久しぶりに聞いた可愛らしい声に、思わず涙が出そうになる。最後に聞いたのいつだったっけ…。

スマホ越しに聞こえる元氣そうなスミレっちの声に一度は安心したけど、ウチが話せば話すほど彼女の声は鼻水混じりの涙声に変わっていった。そりゃそうだよね。突然のことだもんね。言えなくてごめんね、スミレっち。

これ以上話すと余計にツラくなっちゃう。もつと話してたいけど、もう切らないと。

「マジで急すぎる話だね。…本当にごめん。ウチ、スミレっちと出会えて良かったよ。一緒に遊んだときもガチ超楽しかったしさ。…今まで、ありがとう」

ウチはそのまま電話を切ろうとした。けど、スミレっちが大声でいった。

「嫌です！ これが最後になるなんて！ 絶対に嫌です！」

スミレっちは必死そうな声でそう言った。

「アスカさん、お願いします。今から会えませんか？ 私どうしてもあなたに会いたいんです！」

あゝあ、ズルいよスミレっち。そんな声で言われちゃったらさあ。

せっかく無理だと諦めてたのに、会いたくなっちゃうじゃん。

どうしても会いたいと願うスミレっちの言葉に、ウチはノッてしまった。ほんとはやっちゃ、いけないこと。でも、それでも。

会いたい気持ちに、嘘をつけなかった。

ウチは家を飛び出した。集合場所は二人で何度も行ったゲーセンだ。全速力で走った。会える時間はきつと限られているから、なるべく早くあつて少しでも二人の時間を作りたいかった。

あと少しでゲーセンに着くところの横断歩道の向こう側。

ウチにはこっちに手を振るスミレっちの姿が見えた。

「スミレっちー！！」

久しぶりに見たスミレっちはどこかやつれているように見えたけど、あの花のような笑顔は変わっていないかった。

でも、変わっていないのは笑顔だけだった。どこか様子がおかしい。

スミレっちが勢いよくこちらに駆け寄ってきた。突進してくる車には気づいていない。

「スミレっち危ない！」

次の瞬間、私の身体は宙を舞って、そのまま真つ逆さまに落ちた。

痛い。息ができない。くるしい。うるさい。がんばって目をあけると、スミレさんが、スミレっちが、ぼーっとしたかおをしてすわっていた。

…ごめんね…スミレっち…：せつかく、あいに、きて、くれたのに。

さいごにあえて、うれし、かった…

あ、ああ…ユウ…い、ま、そっちに、いくよ……

ブラッディ・マリー

神楽坂

桜の見ごろはとうに過ぎ、足元には踏まれて少し汚くなった花卉が絨毯のように広がっている四月中旬。高校からの友達は大學生最後の年となった子も多いらしく、少し寂しく感じる。そんな友達からはまだ大學生のままでいいなあなんて、よくそんなことを言われるようになった。薬学科に所属する私はあと約3年、このまま何もなく大学を卒業して、就職して、そんなことをするだけじゃ何か物足りない。確かに、人よりも長い大學生生活を謳歌しなくては。そうは思っても何かしたいことは思いつくはずもなく、インスタグラムのリールを適当に眺める。趣味のものから今まで触れてこなかったものまで。

「……あ」

流れてきたのは家でカクテルを作っている動画。いままでお酒に特別興味を示したことがなかった私が、ちよつとでも興味を持った。それってきつと運命なのだと、私の直感がそう言っている気がして、すぐさま近くのバーをそのスマホで検索していた。

スマホのナビに従って歩くこと約15分。まあまあ急な坂道に息を切らしながらやつと着いた目的地のバー。重たいドアをゆっくり開けると、ムーディーな音楽が流れる薄暗い空間が広がっていた。吸い込んだ空気は少し冷たくて、なんだかなれない雰囲気。武者震いをする。ゆっくり、足を踏み入れる。足音がやけに目立って聞こえる。ほかの場所よりも少し明るくなっているカウンター席に座る。お酒に詳しいわけでもないため、どうしていいかわかった挙句、カウンターに立っていたマスターにおすすみを聞くことにした。声をかけて振り返ったその人は、少し長い襟足とセンターパートの前髪が遊び心を、つやのある黒髪は落ちついたこの空間を表しているようだった。「あの、初めてこういう場所に来たんですけど、それを頼めばいいかわからなくて……」

そんなことを言うと、優しく対応してくれた。そのあともいろいろ気にかけてくれたようで、初めてのバーを自分なりに満喫できたと思う。そう思い、そろそろ帰ろうかと思いきやマスターを起すと、もう3時間も経っていた。大学で過ごす3時間とここで過ごす3時間があまりにも違いすぎてなぜか、まだここにいたくなる。チェックをしてもらおうと合図をすると、あの人の4つ折りになった紙を渡された。少し戸惑っていると、優しく微笑まれた。

不思議な体験をしたあの日から約1週間。まだ、あの日のことが昨日のことのように思い出される。帰り際に渡された4つ折りの紙に書かれていたのは、彼のインスタグラムのID。こういふのは私の中では電話番号のイメージが強く、なんだか現代的な印象を受けた。ただ、それを検索してフォローしようとは思えなかった。どうしても遊び人の印象が強すぎてなかなか前向きに考えられなかった。でも、まだ、足りない。遊び足りない。気づけばあの場所へつまずきが向いていた。速足で駅に向かう人が多くなった宵、少し静かになった細い路地、あんなに躊躇してたのに、目の前には1週間前に見たドアが。息を吐いて引く。前と同じ席に着く。今日の赤い服に合うカクテルを作ってほしい。そう伝えて足を組みなおす。赤いチュールが印象的なトッブスに似合ったカクテルが提供される。

「あの、どうしてあの紙を私に渡したんですか。」

「きれいだったのてつい。でも、あまり良い印象じゃなかったですよ。すみません。」

どう返したら良いのか分からず、赤いカクテルに視線を落として、瞬きをいくつかした。

「でも、また来てくださってうれしいですよ。少なくともまた来たい、そう思ってくださいってことでいいんですよね?」

上手く声が出ず、何度か小さく頷いた。

マスターと二言三言交わしながら、口に運ぶ。水位がだんだんと下がってゆくグラスになにかさみしさを感じる。なにがあってもやっぱりここにまだいたいと思わせてくるこの空間が罪だ。つけるとしたらどんな罪がいいだろう

うか。わからないな。そんなことを考えていると時間もかなり経ったようで、少しふわふわしてきた。チェックを済ませた後にフォローしておく、そう伝えて来たときよりも暗くなった下りの路地を駅に向かって歩く。

彼の投稿に、いろんな女性が過去の投稿を遡れば遡るほどあまりにも色とりどりすぎてうろたえる。「……どういうつもり？」

いつもよりも長く寝て迎えた土曜日。スマホを起こすと、2通ほどインスタグラムから通知が届いていた。開くと記憶のない会話が数件と、外で会わないか、そういったメッセージが。こういうのはその場のノリと勢いが大切だと言っていたのが頭によぎる。

『来週の日曜日なら空いてます』

そんなことを送った後に少し後悔しつつその日を楽しみに待つことにした。

いつもよりも気合いを入れてゆるふわに巻いたミディアムヘアー。いつもはつけない水光カラコン。準備に予想以上に時間がかかって急いで駅まで走る。久々のこの体験をしてだんだん笑みがこぼれてくる。

待ち合わせの場所に到着すると、いつもよりも髪が遊んでいる彼の姿が見えた。

「おひさしぶりです。すみません、待ちましたよね？」

「いえいえ、私も今来たところなので。」

そんなありふれた会話を交わしたのちに、映画館へ向かった。デートには向いていないようなホラー映画。共通の趣味がホラーゲームだったため、ちょうどゲームが映画化したのを観に行こう、そういう話になり今に至る。

なんだかんだ日が暮れ始め、お別れの時間がやってきた。にこやかに手を振り、お互いの家路についた。

いつもよりも明るく気持ちのいい朝。
インスタグラムの通知が鳴り、開いた。
目を疑うような投稿。

一番じゃなきや意味がない いるかさん

文化祭まで、あと二週間。

放課後の教室は絵の具の匂いと騒がしい笑い声で満ちていた。

「佐倉、その看板こっちお願い！」

「はい！」

私は筆を置いて立ち上がる。

クラスの出し物は喫茶店。

毎日遅くまで準備が続いていた。

「相変わらず人気者だね」

背後から声がした。

振り返ると、朝比奈湊がいた。

窓際の席に座り、こちらを見ている。

「そうかな？」

「そうだよ」

彼は少し笑った。

「誰とでも仲良くなれるし」

その言葉に私は肩をすくめる。

湊とは春に同じクラスになった。

静かで、目立たなくて、でも不思議と印象に残る人。

気付けばよく話すようになっていた。

「朝比奈も手伝えば？」

「俺？」

「暇そうじゃん」

「ひどいな」

そう言いながらも、彼は立ち上がった。

その日から準備期間のほとんどを一緒に過ごし

た。

看板を作ったり、買い出しに行ったり、帰り道を歩いたり。

だから、

彼に告白された時も、驚きはしたけれど嫌ではなかった。

文化祭一週間前の夕方。

校舎裏。

オレンジ色の光の中で、彼は言った。

「好きだ」

真っ直ぐに。

迷いなく。

「付き合ってほしい」

胸が高鳴った。

私は小さく頷く。

「私も、好き」

その瞬間の彼の表情を、私は忘れられない。

今まで見たどんな笑顔より嬉しそうだった。

まるでずっと欲しかったものを手に入れたみたい。

付き合い始めた湊は、とても優しくかった。

朝は「おはよう」

昼休みは一緒にご飯。

帰りもできるだけ一緒。

友達には羨ましいと言われた。

私も幸せだった。

最初は

違和感が生まれたのは文化祭当日。

喫茶店は大盛況だった。

接客を終えて裏に戻ると、湊が待っていた。

「お疲れ」

「疲れたー」

私が笑うと、彼はペットボトルを差し出してくれた。

「ありがと」

「さっき男子と楽しそうだったね」

何気ない口調だった。

でも少しだけ空気が変わる。

「男子？」

「二組のやつ」

「ああ、呼び込み手伝ってくれた人？」

「名前知ってる？」

「知らないよ」

そう答えると、彼は安心したように笑った。

「ならいい」

その時は深く考えなかった。

ただ少し嫉妬深いのかな、と思っただけだった。

文化祭が終わり、季節は秋になる。

付き合って一か月。二か月、三か月。

湊はどんどん優しくなった。

そして同時に、少しずつ重くなっていった。

「今日、返信遅かったね」

「ごめん、部活だった」

「そうなんだ」

「心配した？」

「うん」

笑顔で言われる。

だから責められている気はしない。

だけど

「部活終わったら一言ほしい」

「分かった」

そんな約束が増えていく。

最初は些細なことだった。

でもいつの間にか。

誰といたのか。

何をしていたのか。

帰宅したのは何時か。

そういう報告を自然とするようになっていた。

冬が近づいた頃。

私は図書室で委員会の仕事をしていた。

一緒にいたのは同じ委員の男子。

本を運んでいただけ。

それだけだった。

なのに。

帰り道。

湊は珍しく無言だった。

「どうしたの？」

「別に」

「怒ってる？」

「怒ってない」

その声が少し冷たい。

しばらく歩いてから、彼は言った。

「楽しそうだった」

「え？」

「図書室」

胸がざわつく。

「見たの？」

「たまたま」

「たまたま」

その言葉を聞いて、なぜか違和感を覚えた。

「朝比奈？」

「何」

「もしかして気にしてる？」

彼は立ち止まった。

夕暮れの中で、その表情はよく見えない。

「気にするよ」

静かな声だった。

「だって好きだから」

その言葉に反論できなかった。

好きだから。

その理由は強かった。

三学期。

受験シーズン。

放課後に勉強会することになった。

参加者は五人。

その中には男子もいた。

その話をした日の夜。

スマホが鳴った。

『勉強会、本当に行く？』

湊だった。

『行くよ』

『男子いるんだよね』

『いるけど、みんなだよ』

しばらく既読がつく。

そして。

『やめてほしい』

心臓が跳ねた。

初めてだった。

はつきり否定されたのは。

『なんで？』

『嫌だから』

『それだけ？』

既読。

しばらく返信が来ない。

数分後。

画面に文字が現れた。

『俺じゃ足りない？』

息が止まりそうになる。

『そういう話じゃないよ』

『じゃあなんで他のやつといるの』

『勉強だよ』

『分かってる』

『でも嫌なんだ』

その文章を見ているだけで苦しくなった。

スマホを握る手に力が入る。

『朝比奈』

『うん』

『私、物じゃないよ』

送信した瞬間、後悔した。

言いすぎたかもしれない。

返信はなかなか来なかった。

十分、二十分、一時間。

そして。

『ごめん』

短い一言だった。

翌日。

放課後。

屋上に呼び出された。

冷たい風が吹く。

湊はフェンスの前に立っていた。

「昨日はごめん」

会うなりそう言った。

私は少し驚く。

「うん」

「嫌な言い方した」

彼は目を伏せる。

「分かってるんだ」

小さな声だった。

「重いよな」

返事ができない。

否定できなかった。

「でも」

彼は苦笑した。

「怖いんだ」

夕日が横顔を照らす。

「好きになりすぎた」

その言葉に胸が痛くなる。

「君がいなくなる想像ばかりする」

「そんなことはないよ」

「あるかもしれない」

「ない」

「未来なんて分からない」

彼は笑った。

「俺、自分でもおかしいと思う」

風が吹く。

沈黙が落ちる。

そして

「でも君が誰かの隣にいるの想像すると苦しくて仕方ない」

その言葉には嘘がなかった。

だからこそ重かった

私はゆっくり彼の隣へ行く。

「ねえ」

「うん」

「私、朝比奈の彼女だよ」

彼は黙る

「誰かのものになる予定もない」

「……」

「でも信じてもらえなかったら悲しい」

その瞬間

彼の表情が揺れた。

初めて見る顔だった。

後悔と、寂しさと

不安が全部混ざったような。

「ごめん」

かすれた声

「信じたい」

「じゃあ信じて」

私は笑った。

「ちゃんと言うから」

長い沈黙。

それから、湊はゆっくり頷いた。

卒業式の日。

桜はまだ咲いていなかった。

校門の前は写真を撮る生徒で溢れている。

「終わったね」

私が言うと、湊が頷く。

「終わった」

「なんかあつという間だった」

「そうだな」

静かな時間が流れる。

高校生活。文化祭。受験。

たくさんの思い出。

そのほとんどに彼がいた

「大学行っても」

湊が言う

「ちゃんと会ってくれる？」

思わず笑う。

「当たり前じゃん」

「本当に？」

「本当に」

彼は少し安心したように息を吐いた。

それから、

私の手を握る。

「俺さ」

「うん」

「多分これからも重いと思う」

「知ってる」

「でも頑張る」

「うん」

「君を困らせないように」

春の風が吹く。

私は小さく笑った。

「たまには困らせてもいいよ」

「え？」

「少しくらいなら」

その瞬間

彼は本当に嬉しそうに笑った。

まるで高校一年生の頃みたいに

重たいほどの想いは、時々人を苦しめる。

だけど

その重さを相手に押し付けけるのではなく、一緒に

抱えようとするなら。

それはきつと愛に変わる。

校門の向こうに続く道を、私たちは並んで歩き出した。

未来はまだ分からない。

それでも、今だけは。

隣にいるこの人と一緒にいたいと思った。

思い出

朝霧

「次は、〇〇です。お出口は右側です。」

(やっと、着いた。)

そんなことを思いながら都会とは違う、昔よく見ていた緑一色の田舎の景色を眺める。地方の高校を卒業後、都会の大学に通うために上京した。だから、年に数回、大学の長期休暇を利用して母に会うために電車で二時間かけて帰郷するのが、恒例行事になっている。

電車から降り、駅からさほど遠くない実家を目指して、周りに田んぼしかない道をしばらく歩いてみると、前方から思い出の詰まった空き家が見えてきた。

(懐かしいな)

小学三年生のころ、一つ年の離れた兄・雪(ゆき)とよくここに住んでいたおじいちゃんと遊んでいた。おじいちゃんは、もともと奥さんと一緒に住んでいたらしいが、先立たれてから一人で暮らしていた。家に行くと、竹馬やあやとり、お手玉などいろいろな遊びを教えてくれた。その中で、俺たち二人が特に好きだったのが怪談だった。

「この村には、地図にも載っていないトンネルがあるといわれているんだ。そのトンネルは、夜中の二時に一人入ると、戦時中に亡くなった人々の声が聞こえてくるんだよ。」

ある夜、その噂を聞いたとある学生が面白半分でトンネルが現れるという場所へと向かった。すると、本当にあるはずのないトンネルがあった。

学生は怖くなったが、「ここまで来たのだから」と引き返すことはしなかった。中に入ると、ひんやりとした空気が肌を刺す。引き返そうとしたが、プライドがそれを邪魔をする。不気味な静けさのなか、携帯の画面が突然消え、ノイズ交じりの音が響く。

「ガラガラ、ガラツ」

しかし、その音は次第に低くゆがみ、最後は泣き叫ぶような人間の声に変わっていく。恐怖で動けなくなった学生の背後に、いつのまにか、生気のない目をした見知らぬ人々がずらりと並び、静かに見つめていた。

「ひっ！」

怯える俺の横で雪がキラキラした顔でおじいちゃんに尋ねる。

「そのトンネルに行けば、お化けに会えるんですか？」

興奮する雪に向かって、おじいちゃんは困惑した顔で論じた。

「雪、お化けに会いたいからと言って本当に探に行ったらだめだからね」

「はい。」

残念そうに生返事する雪。

それから俺たちはコマやオセロ将棋などいろいろなことをして遊んだ。

(あの頃は、本当にたのしかったな。)

子供のころを懐かしんでいると、あつという間に実家の前に着いていた。

「ワンワン！」

声のしたほうを向くと我が家の愛犬・ポチと母が、ちょうど散歩から帰ってきたところだった。

「ただいま、母さん。ポチも元気にしてたか？」

俺はそう言いながらポチの前にしゃがんで頭をなでる。ポチは、嬉しそうに尻尾を振った。そんな俺の姿を見ながら、母が不思議そうな顔をする

「おかえり、雪と一緒に帰ってくるんじゃないの？」

「あ。雪が今日の昼、間違えてバイト入らせてさ。バイトを終わるの待ってようと思っただけで雪に先行ってて言われたから先に帰ってきた。確か、8時に駅に着くって」

「あの子ったら、いつになったらおちよこちよいなところ治るのかしら。まあいいわ、光(ひかる)、荷物を置いて少し休んだら晩ご飯の買い出しを手伝ってちょうだい。今日はご馳走にするつもりだから、荷物が多くて」

「いいよ」

そうして俺たちは賑やかに家の中に入っていった。

晩御飯の買い出しが終わり、帰ってきてテレビを見ているとき、ふと時計を見ると7時40分を指している。

(そろそろ駅に着くころか)

そう思い、台所で料理をしている母に向かって声をかける。

「ポチ連れて、雪の迎えに行ってくる」

「わかったわ、気を付けてね。」

外に出てポチの家に近づくと、俺の気配に気づいたのかすでに尻尾を振って待っている。そんなポチに近づき「今から雪の迎えに行くからな」というとポチは嬉しそうに「ワン！」と吠えた。

「じゃ、行くか」

ポチのリードと懐中電灯を持ち、駅に向かって歩き出した。

(8時近くになるとやっぱ暗いな)

都市部と違ってここは家が少ないので夜道は真っ暗だ。懐中電灯の光を頼りに駅を目指しているとポチが突然吠え出した。

「ワン、ワン！」

「どうしたんだよ、ポチ」

不思議に思い、ポチが威嚇しているほうに懐中電灯の光を向けるとそこには、おじいちゃんの家があった。

(そういえば、おじいちゃんには懐いていたけど、おじいちゃん家の近くに通ろうとすると威嚇するから散歩コース変えたんだっけ)

しかし駅に行くにはこの道を通るしかない。俺はポチを強く抱っこして、おじいちゃん家の前を急ぎ足で通り過ぎようとしたが、その間もポチは吠えるのをやめなかった。

駅に着き、スマホを見ると時間はすでに8時を回っていた。しかし、あたりに雪の気配がなかった。

「おかしいな、この時間なら、さっきの一本道ですれ違っているもいはずなのに」

独り言をつぶやいている瞬間、背後から肩をトン、と叩かれた。

「ひっ——」

ビックリとして振り返ると、そこには必死に笑いをこらえている雪がいた。

「急に出てくるなよな！びっくりするじゃん！」

「すいません、そんなに驚くとは思いませんでした」

「俺がくるってこと知ってたんだろ？」

「はい、母さんが連絡してくれたんですよ」

雪はそう言いながら、スマホの画面を見せてきた。二人の足元からポチが「ワン」と吠える。

「ポチもお久しぶりですね。元気でしたか？」

雪がしゃがんで頭をなでると、ポチは嬉しそうに尻尾を振った。そんな兄の姿を見つめながら、俺は歩き出す。

「ワン」

「じゃ、そろそろかえろっか」

「そうですね」

俺たちは母が待っている家へと向かって歩き出した。

雪と帰る途中、世間話をしていとおじいちゃん家が見えるとまたポチが吠えて威嚇を始めた。

「そういえば、ポチおじいちゃん家になぜか吠えるんですたね」

「そうそうおじいちゃんにはなついていたのにほんとなんでだろう？」といいながらポチを抱っこしようとしたとき俺の足下からカッサと聞こえたので見るとヤツがいた。雪が俺の反応を見て不思議に思い俺のしている方向を見て

「あつ、ゴキブリ」

というのと同時

「ぎゃー」

といいながら俺はおじいちゃん家の玄関のドアに体当たりした。そのせいか築年数の経った引き戸は鍵がかかっていなかったらしくガタガタと音を叩いて開いた。

「相変わらず、君はゴキブリが嫌いなんですね」

雪が呆れながら俺のほうに歩いてくる

「この世にゴキブリを好きな人なんていないだろ！ああ、誰か世界中にゴキブリが死ぬ毒ガス撒いてくれないかな！」

「そんなことしたら生態系が崩れて、地球が減びてしまうかもしれないですよ？」

「ゴキブリごときで滅ぶんだったら、その程度の星だったてことだよ！」

「君は一体何目線なんですか」

雪がため息をついていると雪の隣にいたポチが開いた引き戸からおじいちゃん家の中に入り込んだ。そして、家の奥の方へ走っていった。

「ポチ！」

そうして、俺たちも走っていったポチを、探しているとある部屋からポチの声が聞こえた。その部屋は、おじいちゃんが決して入ってはだめだと強く言っていた部屋だった。ポチを連れ帰るためにその部屋の前に来ると異様な光景があった。

部屋の畳がなぜかすべて裏返しされていたのだ。そんな畳に向かって、ポチはずっと吠えている。

「この下になにかあるのかな？」

俺が部屋に入り、畳に触れようとしている間に雪は吠えているポチを抱えていた。

「光、早くポチを連れて帰りますよ！」

「待てよ、畳が反対なのか気になるじゃん」

「だめですよ。おじいちゃんがこの部屋には入るなって言ってたじゃないですか！」

「まあまあいいから」

雪の反対を押し切って、畳を裏返すと。

あるはずの床板がなく地面がみえた。なんで、地面がみえるんだ？と疑問に思っていると雪が俺が裏返した畳の底面を見つめたまま「あつ、あつ」とおびえていた。そんな様子の雪が気になり、畳を見ると俺は息をのんだ。その畳は人の血がべったりとついていた。

「ひっ」

俺と雪が恐怖で息をのんでいると後ろからベタベタと音がする。俺たちは、ゆっくり音の方へと顔を向けるとそこには、さっきなかったはずの赤い手形があった。

「ギャー」

俺と雪は恐怖の中でポチを連れて一目散に実家へと走っていった。

家へ帰るとすぐに母に混乱した頭で事情を話し、警察が来た。

半月後、俺と雪は、カフェで落ち合った。

「今でも信じられないよ、おじいちゃんが自分の子供を殺していたなんて」

あの出来事があった2週間後、警察から電話があった。警察の話によればあの血はおじいちゃんの子の血だったそう。息子は、この町では、有名な不良でよくおじいちゃんときどき生きているおばあちゃんに手を挙げていたそう。そんな息子に耐えかねたおじいちゃんは、息子を殺した。しかし、死体や殺したときに畳についた血などは、年老いた二人には処理するには大変だった。そこで、二人は死体を血の付いた畳の下に穴をあけ、埋めた。畳は、苦肉の策としてひっくり返したのだという話だった。

「近所の人たちも当時見て見ぬふりをするしかなかったみたいですね」

雪が重い口調で話す。

おじいちゃんがああ怪談を話した後、雪に「探しに行つてはダメ」といったのはあの部屋に俺たちを近づけたくなかったからという、制止だったんだ。

「おばあちゃんがなくなつてから、ずっと一人で耐えていたんでしょね。自分が犯した罪と向き合ひながら」

「おじいちゃん、ずっと一人でつらかっただろうな。」

「そうですね」

雪がコーヒーをすすっている姿を見ながら俺は、おじいちゃんが息子を殺さなければならに程近い詰められていたこと。思い出が詰まったあの家の下に、あまりにも生々しい悲劇が眠っていたことに胸を痛める。

「帰ろっか」

「ええ」

俺たちは席を立ててカフェを後にした。

どうでもいいこと

あんみつ

目が覚めると、そこは知らない世界だった。

「は？」

いや、正確には「知らないような」世界だ。

家族とよく一緒に行った八百屋、学校帰りに寄った本屋。店の名前や外見が所々違っているが、ぱっと見では同じお店かな？　と疑ってしまう。

まるで間違い探しみたいな違和感。

そんな様子が続いているが、明らかにおかしいところがある。どの店も例外無くシャツターが完全に締め切られていた。ガランとして、人っ子ひとりいない。

違うように見えてところどころ同じ。でも何か決定的に違う。見慣れないような、よく見たことのあるような、そんな——少し不気味な町並みが広がっていた。

「どこ、ここ……」

「こんにちは」

「わあ！　びっくりしたあ！」

突然、知らない少女が現れた。

「こんにちは。私はミコ。あなたを案内する者よ」

いや、よく知っていると言っているのかもしれない。

その少女は自分と同じ顔をしていた。

「わ、私！？　あ、でも髪の色が白髪……。あなた、だれ？」

『ミコ』と名乗った少女は、ニコッと笑った。

「白髪じゃないよ。光に透かすと水色も混じってるんだよ。誰かってさっきも言ったよね？　わたしはミコ。それ以上でもそれ以下でもない」

「そういうことじゃなくて。あなたが何者か聞いているんだけど」

ミコは先程と変わらない微笑をたたえながらこう言った。

「どうだっていいわね、そんなこと。それより、あなたはカンナであつていいかしら？」

「な、なんで私のことを」

「さあ？」

ミコはさらに笑みを深めた。ついてきて、と言い放って、こっちのことはお構い無しにこの街を案内し始めた。

「ここは紅山町（べにやまちょう）。街全体が赤い霧に包まれていることが名前の由来らしいわ」

突然知らないところに連れてこられた——この表現であっているか怪しいが——驚きで気にしていなかったが、確かに街全体は赤い。太陽の光が少ししか届いていない。それに、カンナの住んでいる街は青海町（あおうみちよう）だ。少なくとも、異なる場所であることがわかった。

ふとカンナは疑問に思った。

「ねえ、ミコ。来たときから思ってたんだけど、この街全然人がいないね。あなた以外の人間を見てない」

するとミコは不思議そうな顔をしてこう言った。

「？　あなたの住んでいる場所にはもつと人がいるの？　すごいわね」

「どういうこと？」

「この街……というよりこの世界、ね。人がぜんぜんいないの。そうね、だいたいどこの国も総人口数は約三人くらいかしら」

「さつ三人……？！」

「ええ。それぞれの国に『女王様』と呼ばれる人がいるの。女王様は人間ではないわ。どんな存在なのか、どんな見た目ののか、わたし達は知ることができない。そもそも、女王様の言っていることが嘘か真か……それすらわたし達には知り得ないことなの」

どんな存在なのか、どんな見た目かも分からず、発言内容の真否も定かではない支配階級とはいいたい、どのようなものなのだろうか。つくづく不思議な場所だ。カンナはそう思った。

自分の住んでいる世界とはあまりにも違いすぎる。

「ねえ、私、元の世界に帰れるの……？」

「帰れるわ、心配しなくても」

根拠のないことを、どうしてか自分とそっくりな少女は平然と言う。どうやってそれを信じろと言うのか。

「……あなたは誰？」

「わたしはミコよ」

「そうじゃない、違う！ さっきもだよ。私の名前も知っていたし、顔も私そっくり。そんなのわたしと無関係なわけじゃないじゃん！ なんなの、ここ！ 何もわからないし、教えてもくれない！ わけわからないところに突然放り込まれて、こわくて不安なのに、ミコは何も教えてくれない！」

「……ごめんね」

「は？ ごめんってなに！」

少しキレ気味に返事をする、続けてミコはこう言った。

「わたしたちはあくまでもこの世界の案内。わたし自身のこと、それからわたしとあなたの繋がりを教える権利がないの。というか、女王様がそれを許さない」

「……」

それだって、女王の言う事が本当か嘘か分かなければ確かめようがないではないか。そう思っ黙っていると、笑みをたたえていたミコは初めてその笑顔を崩した。

「わたしだって本当は教えたい。すべてを教えてスッキリしたい。あなたとこうやってモヤモヤしたまま接するのはいやなのよ」

「なら、言えはいいじゃん！ だって、さっき言ったよ！ 女王の言葉は本当か嘘かわからないって！」

「うん……。でもね、それを言うと、わたしたちの身に『なにか』が起きるらしいの」

「それも、女王様が言ったことなの？」

「ええ」

「それだって嘘かもしれないじゃない？ だって、女王様に一回も会ったことないんですよ？ そんな顔も見せないで、言葉だけであなたたちを操る人なんて信じないほうがいい」

カンナがそう言うと、ミコはその場を動かなくなってしまった。

「……ミコ？」

カンナが呼びかけても返事がない。

「それは、できない……」

「なんで？」

「私達の……ナカに備え付けられた機能がそれを拒絶するから」

「……は？ な、何言ってるの？」

「つまりは本能よ。……あなた、お腹が減ったらなにか食べたい。自然にそう思うでしょ？ 眠ければ眠るように。思わないなんてできない。自然に浮かんではしょう。……わたしたちにとってはそれ同じ感覚なのよ」

「は？ ……どうということ？」

するとミコはハア、とため息を付き、

「説明しても無駄。進むわよ」

と言うと、スタスタと歩きだしてしまった。

「あ、待ってよ！」

そこから先も、ミコはこの世界の事を少しずつ教えてくれた。

だが、ただだけカンナがせがんでも、一向に『ミコ自身』については教えてくれなかった。

そうして、しばらくたったとき、ミコがカンナの隣に立ち、

「ミコは学校、楽しい？」

と話しかけた。

今まで、ミコはカンナに話しかけても、この世界にまつわることしか喋らなかつた。だから、カンナは日常生活のことについて聞かれたとき、驚いた。ミコは戸惑いつつ、

「う、うん、楽しいよ……。友達もいるし、部活も楽しいし、勉強は大変だけれどそれでも楽しい」

「そう。ミコはなんの部活に入っているの？」

「入ってない。帰宅部。……てか、何企んでんの、あんた。いきなり私の私生活について聞き出して……」

「別に何も。ほら、もっと話して」

「もってって、何よ」

「あなたの私生活のことについて」

カンナは訳が分からない、と思ったが、話してくれなさそうと察したミコが伏目がちになると、なんだかその様子がかわいそうになってついというなずいてしまった。

「へえ……そんなことがあるのね。ふうん。」

ミコは興味深そうにうなずいた。

「なによ、そんなに面白い話だった？……ただの、変哲のない日常話だけど」

「そこが面白いの。……わたしは、味わうことのない話だから」

「……そっか」

そこから二人は話した。あてもなく、ぶらぶらと歩きながら。

その様子はさながら『友達』だった。

『おめでとうございます』

機械音声がそこら一体に響き渡る。

「?! な、なななに?!?!」

「あ、行けるみたいね」

「は? へ?! な、なんなの?!?!」

「さあ、あなたの然るべき場所へ……」

そうミコが言うとかンナの体がふわっと浮き始める。

「え? ねえ、まって、体が浮いてるんですけど?! これ、なに? 怖い!! ちよっと、ミコ?!」

「だから帰れるのよ、あなたの世界へ。青海町へ。」

「え、そうなの?! ど、どうやって?」

ミコはいつもの笑顔でフツ、と笑う。

「そんなの、どうでもいいことでしょ」

「ま、また、いつもの……! こんな、こんな時になってまで!」

「大丈夫。わかる時が来るから」

はあっ?! そう、カンナは言おうとしたが、声が、でない。

「……?!……っ、……!!」

「もう声が出ない段階に入っちゃったか。早いね。でも、大丈夫。本当に。」

私の言葉を信じて。絶対、大丈夫」

その瞬間、ミコの目の前がいきなり光って、何もわからなくなった。

朝。

何の変哲のない朝が始まった。

ミコは言う。

「……なにか、大事なことを忘れてる気がする。でも、まあ」

『どうでもいいよね』

折下ふみかの「終わり」

ラギ

『ふみかはさ、友達ほしいと思わないの？ 私創ってあげるけど。』

『別に、要らないよ。欲しいともあんまり思わないし。』

『そっかー…』

『それに、友達は〈創る〉もんじゃないでしょ。』

『それはそうだけど…』

あの時あの子は、困ったように笑っていたような気がする。

どうして、今、こんなことを思い出したのだろう。

私は今、何もなくなってしまった図書室（だった場所）にいる。

壁一面に並んでいた本も、木目がおしゃれで割と気に入っていた机も、全部残っているのは、カウンターと棚くらいな。

がらんとした部屋の中、絶妙に日当たりの良くない部屋の、一番日差しが当たるところに寝っ転がって、よく見えない青い空を見上げている。

普段なら汚れるし、絶対にしないのだけれど、どうせ、最後だから。実体を持たない身体に日が当たっている。

今日、ここは取り壊される。

日差しの暖かさに、ついぼんやりとしてしまう。

ふと、今までのことが頭に浮かんできた。

生まれてから、今までの記憶。

といっても、あまり多く…いや、たぶん、ほとんどを、思い出せないけれど。ふとよぎった、比較的鮮明な記憶。

私に『友達』を創ろうとした子がいた。

『名前も決めてただけだなあ…』

『作る気満々だったんじゃない…』

『姿も決めてた。性格はまだだったけど…大まかには決まっていたかな。』

『本当に作る気だったんだ…そこまで決めておいて、なんで私に『友達ほしい？』なんて訊いたの？』

『えー…だって、『ふみかの』友達だよ？ ふみかがいららないのに作っても…』

『だったら最初から訊けばいいのに…』

あの子がいたのは、何年前だっけ。

何年？ いや、何十年…？ 百年を超えていたっけ？

『まあ、ある意味ふみかなんだけどね。』

『どういう意味？』

『ふみかの名前を決めたとき、私が出した案は使われなかったじゃん？ その名前を使ったから。』

『じゃんっていうか、当時私まだ生まれてないからわからないんだけど…って、使いまわし…？』

『まあ、悪い言い方をすればそうなるかな…？ でも、私もただ使いまわしたんじゃないよ。』

『使いまわしたことは認めるんだ…』

『私、あの名前気に入ってたから。このままだにも使わないで消えさせるのは、忍びなかったっていうか…まあ、そんな感じ。』

そうだ。

あの子は百年くらい前に、いなくなっている。

気づいたとき、ふと心の中に風が吹いたような気がした。

…さみしいんだ、私。

最期だつていうのに、私の隣には誰もいない。

そのことが、たまらなくさみしい。

…あの子が創った友達が、傍にいてくれたら、さみしくなかっただろうか。

ようやく、あの子が何を思ってたんことを言ったのか、わかった気がした。彼女はきつと、自分が居なくなっても私の近くに在り続ける、自分の分身を創ろうとしていたのだ。

欲しかった。

やっぱり、欲しかった。

私の、私のためにあの子が創ってくれた、私だけの、永遠の友達。

八朔日澤ちゃん。

…どんな子だったのかな。

知りたい。

友達になってほしい。

…でも、気づくのが遅かったなあ。

…欲しかったな、友達。

ああ、でも。

長い永い時間を私と一緒に歩き続けてくれた彼女たちの軌跡が、最後の最期まで残されていた、あの部屋にいればよかったかもしれない。

そうすれば、独りじゃなかったかもしれないな。

閉じていく意識の中、建物の外から重機の唸る声を聞いた気がした。

☆創作閑話☆

◆「鳥だったある日」の鳥のモデルは私の家にいるセキセイインコです。ひなのころはよく部屋の中を飛んでいたのですが、気づけば早歩き専門になっていました。今でもちよつとは飛びますよ。町は私の理想郷に近いものですね。読んでくれてありがとうございます。【銀平糖】

◆今回は二作、載せることができました！「魔女と探偵」は、前回、一九〇号に載せた「ある家族の一日」のもとになった作品です。ラギワールド全開です!!「ある家族の一日」では多少の設定変更をしているので、読み比べてみてもおもしろいかもしれないですね。「折下文香の『終わり』」は、前回の「折下ふみか特集」の時に思い付いたネタだったんですが、ふみかちゃんの誕生を祝う企画で死ネタを書くってどうなん?と思って、出せなかったものです。ふみかちゃんは永遠に幸せでいてくれ、頼むから。もう一つ、ふみかちゃんが生まれた当時、ふみかちゃんの名前の候補として挙げた名前についての話でもあります。『あの子』はもちろん、私です。澤ちゃんもキャラクタリー化しないかなあ。【ラギ】

◆なんか変なところで終わったな。こいつ、文才ねえな、と思ったその君!次の部誌でミコが主人公のものを書くつもりなので安心してくださーい!!!まあ、実をいうと締め切り当日に終わらせたのでめっちゃ急いで終わらせただけですね……はは。【あんみつ】

◆小説を書くのは初めてだったので、正しい文章も構成もよく分かりませんでした。頑張って書きました。楽しんで読んでくださると嬉しいですよ。【レツサーパンド】

◆ここまで読んでくださりありがとうございます。今回初めてせせらぎの文章を書かせていただいた為、拙い部分も多くあったと思いますが、なにか心に残るものがあれば幸いです。また、今回書かせていただいた「行く春」は、入学したのときを思い出し、当時の不安や、新人生らしい葛藤を序盤に置きました。この話の衣玖のように、最初は不安でも焦らずともゆっくりと人

間関係は作り出されていくものだと、伝わっていてくれたらうれしいです。

【薫】

◆初めての作品でしたが、いろいろな人と案を出しより良い作品を生み出せました。いろんなジャンルにもこれからチャレンジしたいです。【亀田】

◆初めての小説を書かせていただきました。東雲鵲です。色々大変でしたが楽しく書くことができました。誤字があるかもしれませんがそこは温かく見守っていただけると幸いです。【黒澤】

◆拙い文章ですが、読んでくれたら幸いです。【朝霧】

◆いるかさんです!ここまで読んで下さりありがとうございます。初めての作品なので拙い文章だと思いますが楽しんでいただけたら幸いです。私自身重たな恋愛作品が好きなのでその要素を少し取り入れてみました。お話を読んで少しでもドキドキした!と感じてくれたらうれしいです。より良い作品を書けるように精進しますので次回も楽しみにしてください。【いるかさん】

◆読んでくださりありがとうございます。神樂坂です。私は今回の作品についてかなり後悔が残っている状態でして、過去一の駄作と言っても過言ではないものを作り上げてしまいました。次の冬のせせらぎでは満足できる小説を書きあげたいと思っていますので、応援してくださいとうれしいです。

【神樂坂】

◆ここまで読んでくださってありがとうございます。幻想翡翠です。今回、前号のあとがきでも書いた通り「故人」の夢野アスカをを書きました。短くするつもりが、結果的には「故人」よりも長くなってしまいました。やっとしまった……。でもこれでも最大限短くしたんですよ!

信じてください! てなわけでここに書ききれなかった小ネタを書こうと思います。まずアスカさんの一人称の違いについて。「私」と「ウチ」の二つが出てきますが、これは、彼女の人格が違うという意味です。一人称が「ウチ」の時は本来の彼女とは別人格が出てきていると捉えて読んでください。続いて時間設定について。これについてはマジですみません。ミスリ

ました。ちよつとうーん……? となると思います。気にせずフィーリングで読んでください。終わった…。以上、幻想翡翠でした。長文失礼しました。

【幻想翡翠】

◆どうも、みみずです。今回も思いのままに書かせていただきました。話の内容が身近で、命に関わるデリケートな内容だったこともあり、いつもよりもっと丁寧に、を心掛けました。命を授かること・失うことはどちらも人生において重要であり、それらは記憶や生き様にずっと残るものであると、私は考えています。失ってしまったものは戻らないし、それに傷ついた心も、その後の人生も、戻ることはありません。だからこそ、その人生の終わりに、その人の生き方に応じた施しがありますようにと、願わずにはいられません。【みみず】

◆特にみてほしいところは、瀟晏というキャラの過去です。胸糞展開をかけるように頑張りました。そして、書いて一番楽しかったのは、瀟晏の過去のところと、沈微の顔を例えるところです。沈微の顔を細部まで例えるようにも工夫しました。ちなみに、女性たちが話すところに伏線がたくさん貼ってありますが、それを見つけた人はすごいと思います。【薛曉】

◆今年は新入部員が八人もいます。毎度のことですが、高校に入學して二ヶ月足らずで立派な小説をかくもんだなあと感じさせられます。しかも多彩(多才?)ですね。とかく内省的な小説に陥りやすいんですが、ファンタジー、サスペンス、ポエティックなもの、形式を破壊しようとするもの、とにかく意欲的な作品が並びました。先輩たちはあるイミ自分たちのスタイルに磨きをかけた作品を揃えてきました。三年生は部誌としては最後の創作になります。きみたちにはセンスがあるので、小説を書くことをやめないでください。二年生は三年生に負けないように、自分の「殻」を破るような作品の執筆を期待します。そのためにはたくさん的小説を読みましょう。かくいうアタシもきみらに刺激されて、創作意欲が目覚めました。三十年の眠りから覚めたアタシの作品は文芸部の発表の場を借りたりして(私物化?)、発表しようと思っています。がんばるぞー。【顧問】

せせらぎ 第191号

2026年7月吉日 発行

編集・発行 群馬県立太田女子高等学校文芸部

〒373-8511 群馬県太田市八幡町 16-7

群馬県立太田女子高等学校

部員 石原真奈美 藤崎沙彩花

池田琉音 牛久綾乃 永井滯 松澤咲良

田村こまき 泉穂乃 加治屋有花 中村心咲

亀田咲良 グエン カン リン 黒澤優花 飯島未来

顧問 吉田俊宏 早川由子

表紙 石原真奈美

印刷・製本 有限会社長井製本所